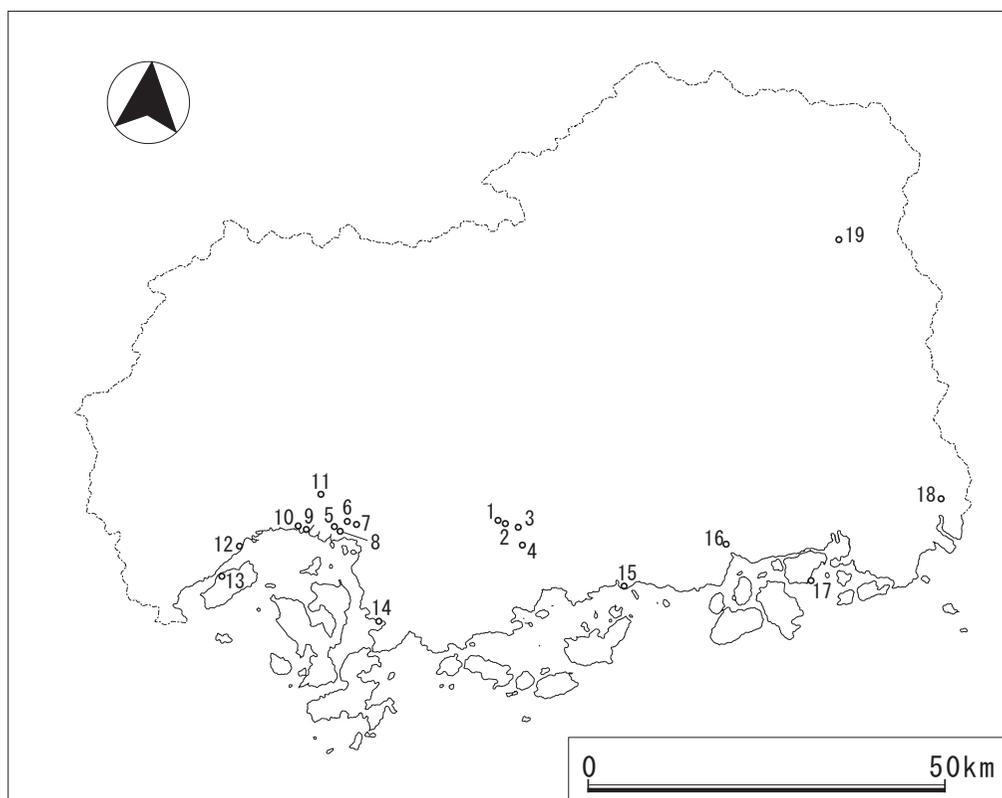


2. 開発に伴う協議と立会・試掘・発掘調査の概要（2015年度）

1. はじめに

広島大学が所管する広島県内の施設所在地は、本部キャンパスが位置する東広島市および統合移転する以前に本部キャンパスなどが所在した広島市を中心に広島県各地に分散しており、合計 27 ヶ所を数える（大学・附属学校校舎等を中心とする敷地 7 ヶ所、研究所等施設敷地 7 ヶ所、課外活動施設敷地 4 ヶ所、職員宿舎敷地 7 ヶ所、その他 2 ヶ所）。これら大学関連施設において 2015 年度に埋蔵文化財に関連した開発事業に伴って 43 件（1 件は前年度からの継続）の協議を行った。また、東広島地区の遺跡保存整備が 2 件あ



第 8 図 広島大学の校地所在地図（職員宿舎・その他を除く）

1. 東広島地区
2. サイエンスパーク地区
3. 西条三永地区
4. 下三永地区
5. 東千田地区
6. 霞地区
7. 東雲地区
8. 翠地区
9. 観音地区
10. 庚午南地区
11. 三滝地区
12. 廿日市地区
13. 宮島地区
14. 呉地区
15. 竹原地区
16. 三原地区
17. 向島地区
18. 春日地区
19. 帝釈未渡地区

第2表 2015年度（平成27）広島大学における開発に伴う埋蔵文化財協議・発掘届一覧

件名	対象面積	協議書・発掘届提出日	対応
東広島地区			
1 動物飼育実験室改修機械設備工事	23.25 m ²	2015年4月	工事
2 (生) 農器具庫とりこわし工事	203 m ²	2015年5月	工事
3 (生) 農器具庫新営工事	83.2 m ²	2015年5月	工事
4 工学部G7棟新営工事	4.6 m ²	2015年5月	工事
5 ががら道補修工事※	30 m ²	2015年5月	工事
6 アカデミック地区屋外点字ブロックほか補修工事※	95 m ²	2015年6月	工事
7 鏡西谷遺跡復元整備工事	335.173 m ²	2015年6月	立会
8 構内道路不陸補修等工事	66.45 m ²	2015年7月	工事
9 掲示板設置工事	1.5 m ²	2015年7月	工事
10 工学部C1棟おもしろラボ（仮称）改修工事	3.6 m ²	2015年7月	工事
11 教育学部広島銀行店舗外ネットワーク更改工事※※	1.0 m ²	2015年7月	工事
12 植込整備工事	100 m ²	2015年7月	工事
13 池の上学生宿舎11号館前給水管漏水修理工事	2 m ²	2015年7月	工事
14 教育学部K棟東側駐輪場取設工事・教育学部K棟北側車止め取設工事	206.7 m ²	2015年8月	工事
15 中央図書館南雨水管洗浄等工事	27 m ²	2015年9月	工事
16 コベルコ建機次世代先端技術共同研究講座ショベル実機試験	2620.5 m ²	2015年9月	工事
17 第3ゲート南側歩道補修工事	87.26 m ²	2015年9月	工事
18 植物園落ち葉集積場設置工事	196 m ²	2015年9月	工事
19 工学部強震計埋設工事	40 m ²	2015年9月	工事
20 イノベーションプラザ玄関防水補修その他工事	7.6 m ²	2015年9月	工事
21 理学部ヘリウム液化室南側地盤補修工事	2.0 m ²	2015年9月	工事
22 農場通路法面補修その他工事	310 m ²	2015年10月	工事
23 環境整備（道路舗装）工事	2,720 m ²	2015年10月	工事
24 南クラウド表層整備工事※	7,400 m ²	2015年12月	工事
25 (埋文) レンガ柵移設工事	約4 m ²	2015年2月	立会
26 山中池南遺跡第2地点移設遺構改修工事	2 m ²	2015年2月	工事（次年度実施）
霞地区			
1 環境整備（たんぼぼ保育園園庭拡張）工事	約500 m ²	2015年4月	立会
2 臨床研究棟改修工事	11 m ²	2015年6月	立会
3 霞会館北側雨水排水補修工事	約0.36 m ²	2015年10月	工事
4 臨床研究棟改修機械設備工事	72 m ²	2015年11月	立会
5 歯学系教育棟（講義棟D）改修機械設備工事	約20 m ²	2015年10月	工事
6 臨床研究棟外構工事	約120 m ²	2015年11月	工事

7	共用棟2屋外給水管漏水修理工事	1.5 m ²	2015年12月	工事
8	石碑移設工事	約9 m ²	2015年12月	工事
9	総合研究棟東側道路排水補修工事	40.5 m ²	2015年12月	立会
東千田地区				
1	知的人材育成センター新営工事	約2,500m ²	2014年7月	立会
2	知的人材育成センター外構工事	約8m ²	2015年6月	立会
3	広島ナレッジシェアパーク、スマコミ構築工事	15.41m ²	2015年10月	立会
4	駐輪場取設その他工事	2,980m ²	2015年11月	立会
翠地区				
1	附属学校部食堂改修機械設備工事	16 m ²	2015年6月	立会
2	附属学校部講堂裏雨水排水改修工事	約10 m ²	2015年7月	立会
3	附属学校部中・高食堂廻り舗装改修工事	約128 m ²	2015年11月	立会
三原地区				
1	附属幼稚園底支柱取り合い工事※	約12 m ²	2015年1月	工事
向原地区				
1	向島臨界実験所境界杭確認※	約10 m ²	2016年1月	工事
春日地区				
1	雨水排水改善工事	約120 m ²	2015年1月	工事

件名の最後に*印を付したものは学内協議のみ、**印を付したものは大学外の事業者が開発原因者である

り、発掘届（文化財保護法第92条1通、同法第93条第1項2通）を提出した。このうち、東広島地区の教育学部広島銀行店舗外ネットワーク更改工事は広島大学外の事業者が広島大学敷地の一部を借地し、施設等を設置するもので、広島大学外の事業者が工事主体である。また、東広島地区の鏡西谷遺跡復元整備工事は中止（芝張りに変更し、芝張り整備に伴って立会調査を実施）、山中池南遺跡第2地点移設遺構改修工事については次年度に実施した。

本年度の開発事業については、協議回答等に基づき、13件について立会調査（合計42.5日）を実施した。開発事業は東広島地区が半数以上を占めるが、立会調査は広島市内が中心であった（第2表）。立会調査件数で見ると、東広島地区1件、霞地区4件、東千田地区4件、翠地区1件である。立会調査実施合計日数の実績で見ると、東広島地区6.5日（10回）、霞地区6.0日（8回）、東千田地区26.0日（29回）、翠地区5回（4.0日）である（カッコ内は立会調査の回数）。東広島地区の立会調査は保存に関わる整備工事であり、今年度は東千田地区において、開発に伴う立会調査日数が大幅に増加した。いずれも知的人材育成センター建設（工事名は仮称で、正式には東千田未来創生センター）

に関わるもので、昨年度からの継続事業である。東千田地区は広島高等師範学校跡地であり、本年度の調査で建物跡、煉瓦組榼、石垣、道路状遺構など、関連の遺構が多数検出された。

2. 試掘・立会調査の概要

次に、地区ごとに、試掘調査、立会調査の概要について述べる。

東広島地区（東広島市）

1) 鏡西谷遺跡復元整備工事

所在地 東広島市鏡山二丁目 2965 番

調査期間 2016年2月16日・17日・23日・24日・25日、3月10日・15日

調査面積 約2,200 m²

調査者 石丸恵利子



第9図 2014年度東広島地区の立会調査位置図（縮尺1：20,000）

(1. 鏡西谷遺跡復元整備工事、2. (埋文)レンガ樹移設工事)

調査概要 当初、D地区の弥生時代住居跡の復元整備を行う計画であったが、前段階として、遺跡全体の測量調査を行った。詳細は第3部に記す。

2) (埋文) レンガ柵移設工事

所在地 東広島市鏡山一丁目1番1号 374
番地

調査期間 2016年3月23日・24日・25
日

調査面積 約4㎡

調査者 石丸恵利子



写真1 移設工事状況

調査概要 東千田地区駐輪場取設その他工事に伴って出土した煉瓦組柵、建物礎石などの保存・展示を目的に東広島地区埋蔵文化財調査部門の植栽部に移設した。これに伴って立会調査を行った。詳細は第3部に記す。

霞地区 (広島市)

1) 環境整備 (たんぼぼ保育園園庭拡張) 工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

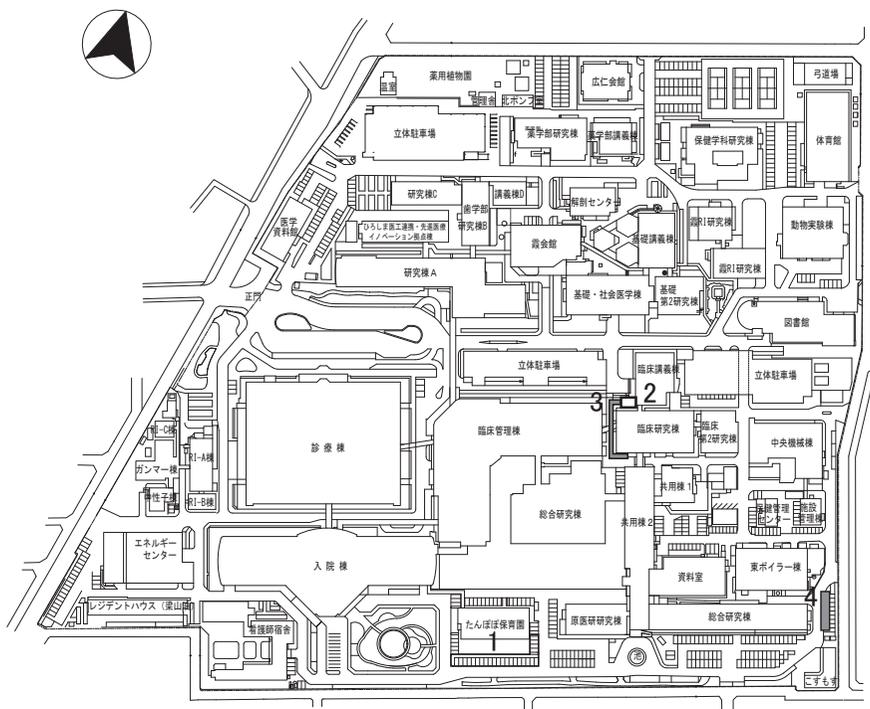
調査期間 2015年6月24日・30日、7月6日・13日

調査面積 約500㎡

調査者 石丸恵利子、大近美穂、藤野次史

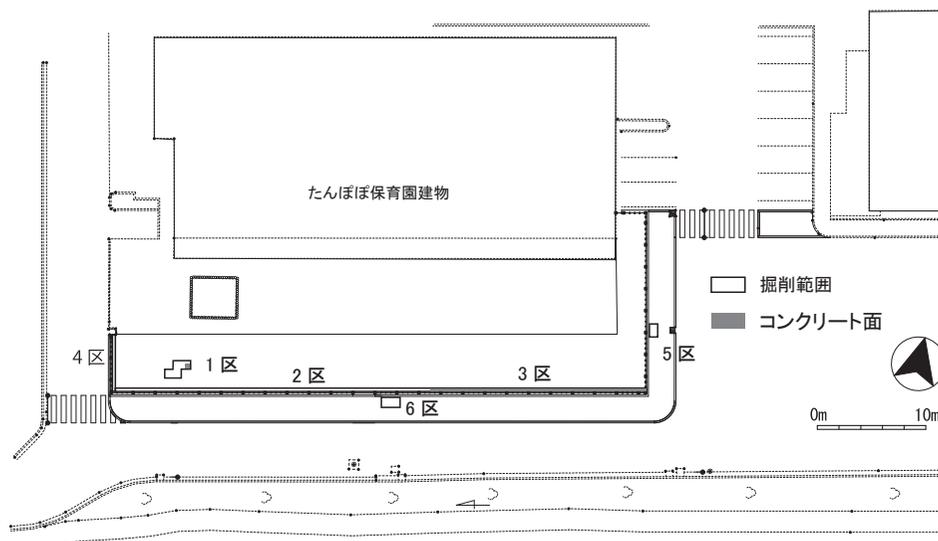
調査概要 霞地区にあるたんぼぼ保育園の園庭拡張工事に伴う、植樹と外灯移設、園庭周りの排水溝設置のための掘削において立会を実施した。

1区：樹木移植先で、東西2.5m×南北1.6mの範囲で掘削を行った。当初南北0.8m幅で掘削を開始したが、地表下約0.3mで南北方向に電気配線が、また東西方向に塩ビ管の埋設が確認されたため、北東側にずらして掘削を進めた。地表下約1.0mまで掘削した結果、アスファルトを除去した下の碎石層、真砂土層、黒灰褐色土層、暗い黄褐色土の堆積を確認した。また、南東隅で段状のコンクリート（標高：上段上面1.083m、下段下面0.568m）を確認した。コンクリートの北側および西側は黒灰褐色土が堆積し（真砂土下での掘り込み）、コンクリートは暗い黄褐色土の上に堆積している状態を確認した。植樹可能な範囲のみを掘削したためコンクリートの範囲は不明であるが、南側と東側に延びていると考えられる。コンクリート部分は取り除かず、樹木を移植することとした。



第 10 図 2015 年度震地区の立会・試掘調査位置図 (1 : 5000)

- (1. 環境整備 (たんぼぼ保育園園庭拡張) 工事、2. 臨床研究棟改修工事、3. 臨床研究棟改修機械設備工事、4. 総合研究棟東側道路排水補修工事)



第 11 図 たんぼぼ保育園園庭拡張工事調査区配置図 (1 : 700)



写真2 たんぼぼ保育園の園庭拡張工事調査区全景（東より）



写真3 たんぼぼ保育園の園庭拡張工事5区コンクリート面検出状況（北より）



写真4 たんぼぼ保育園の園庭拡張工事5区完掘状況（西より）

2区：立会を実施していないため、堆積状況は不明である。

3区：掘削範囲内全面でコンクリート面を確認した（標高：西端 1.103 m、東端 1.083 m）。

4区：コンクリート面などの構造物は確認されなかった。

5区：外灯設置のための掘削で、東西 0.9 m×南北 1.4 mの範囲においてコンクリート面を確認した（コンクリート上面：標高 1.093 m）。外灯掘削のためにはコンクリート面の除去が必要で、コンクリートを取り除き約 1 m掘削した（標高 0.123 m）。厚さ 10 cmのコンクリート下には、人頭大からこぶし大の角礫が敷かれ、その下層で黄褐色土層の堆積を確認した。兵器支廠関連施設建設前の造成土と考えられる。

6区：もう一方の外灯設置場所で、東西約 1.5 m×南北 0.9 mの範囲を地表下約 1.0 m



写真5 たんぼぼ保育園の園庭拡張工事6区完掘状況（東より）

まで掘削した。掘削範囲の堆積は、15cm 前後のアスファルト下の碎石層、10 cm前後の黄褐色真砂土、以下暗褐色土層であり、コンクリート面は確認されなかった。暗褐色土中にはフェーム管、鋳鉄管などが埋設されており、すべてそれらの掘削埋土であった。

以上のように、掘削をおこなった広い範囲においてコンクリート面を確認し、第 13 兵器庫 (16 号館) に関連する構造物 (床面) を確認したものと考えられる。2 区においても 1 区東側程度まではコンクリート面が残存している可能性があることや、6 区以南は建物外に相当するであろうことが確認された。

2) 臨床研究棟改修工事

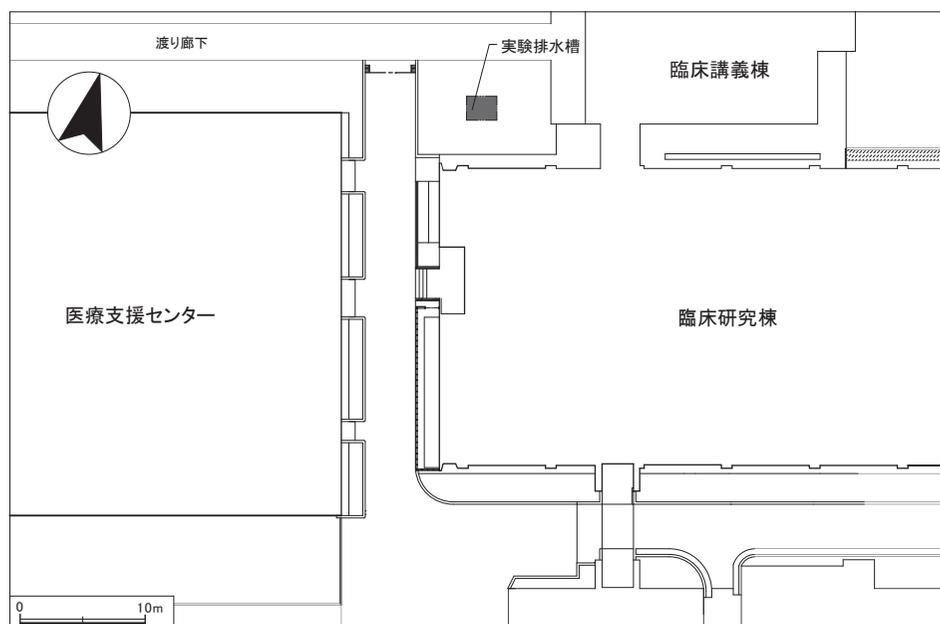
所在地 広島市南区霞 1 丁目 2 番 3 号

調査期間 2015 年 6 月 24 日、7 月 1 日

調査面積 11 m²

調査者 藤野次史

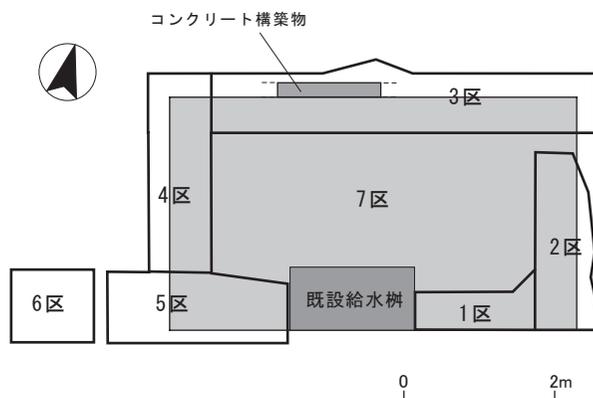
調査概要 臨床研究棟改修工事に伴って立会調査を実施した。調査対象地は、臨床研究棟北西隣接地で(第 12 図)、排水槽設置に伴う掘削工事である。シートパイルを設置して、地表下約 3 m まで掘削した。最初に、シートパイル設置場所の地中障害物の有無を確認するため、排水槽周囲を幅約 1 m、深さ 1.1 ~ 1.2 m の規模で掘削した。排水樹掘り方の南部中央に既設給水樹があり、その東側隣接地 (排水樹掘り方南辺部棟部) を 1 区とし、



第 12 図 臨床研究棟改修工事調査区位置図 (1 : 600)

反時計回りに順次2～5区とした。
また、5区西側隣接地を6区とした(第13図)。

3区西半部の地表下約0.6mでコンクリート構築物を検出した(第13図コンクリート構築物、写真8)。上部および東西両端が削平されていた。東西約1.4m、厚さ約0.2m、現状で高さ0.53m(掘り底のさらに下層へ連続している)の規模である。コンクリー



第13図 臨床研究棟改修工事調査区配置図(1:100)
(中央の淡灰色部分は排水桝掘り方)

トの南面は型枠の痕跡を残しているが、北面は平滑に仕上がっていた。水槽、防火用水施設等の一部の可能性がある。

3区を含め、多くの地区で配管等が敷設されており、いずれの地区の堆積土も基本的に第二次世界大戦後の工事埋積土で、旧広島陸軍兵器支廠の造成土は確認できなかった。

排水槽掘り方(7区)は地表下約3mまで掘削(南西部は約4mまで掘削)した(写真9)。調査区北半部を中心に地表下1.2～1.3mで兵器支廠造成土と推定される黄褐色砂質土(真砂土)を確認した。北半部では厚さ0.5～0.6mの堆積層が残されていたいが、南側は第二次世界大戦後の工事が地表下1.5～2.0mまで及んでおり、一部で堆積が確認されたのみである。兵器支廠造成土の下層は、上層より、暗灰色砂質土～シルト(水田土、厚さ約40cm、2枚に細分可能)、淡灰色～暗灰色砂層、淡灰色砂層、青灰色砂層の堆積層を確認した。

3区で検出したコンクリート構築物は10cm前後の大型円礫を多く含み、旧広島陸軍兵器補給廠(支廠)に関連した遺構と推定される。排水槽掘り方(7区)の掘削途上で破損した煉瓦組柵の壁面部を複数確認した。すべて工事埋積土内で、過去の工事で破碎したものを工事終了後に埋積したものと考えられる。

3) 臨床研究棟改修機械設備工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期間 2015年12月7日

調査面積 72㎡

調査者 藤野次史



写真 6 臨床研究棟改修工事掘削状況（北西より）



写真 7 臨床研究棟改修工事掘削状況（北西より）（西より）



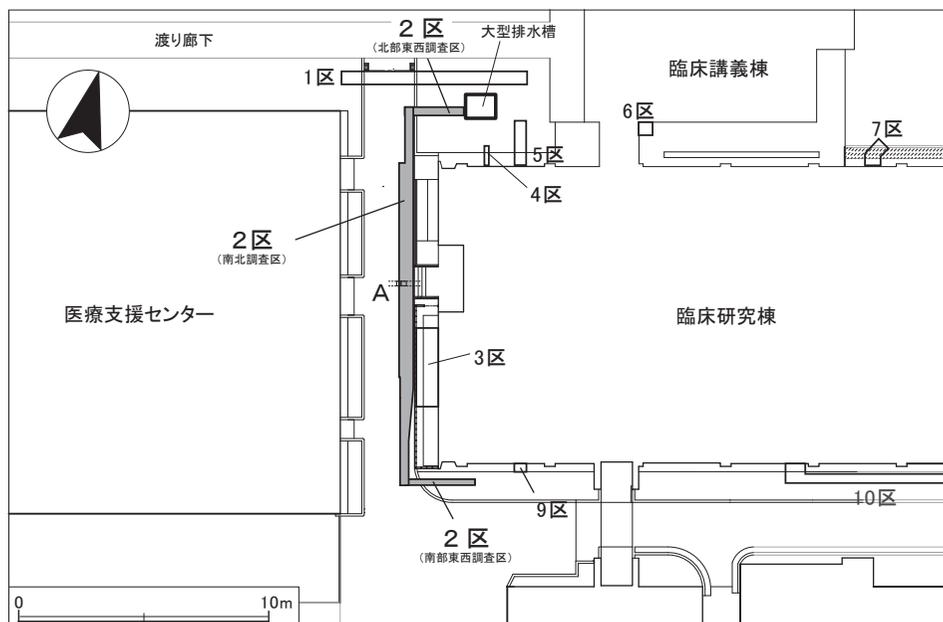
写真 8 臨床研究棟改修工事 3 区コンクリート構築物（南西より）



写真 9 臨床研究棟改修工事排水柵掘り方完掘状況（下底は海成砂層）（北西より）

調査概要 臨床研究棟改修機械設備工事に伴って立会調査を実施した。工事対象地区 1～12 区のうち、掘削を伴う 2 区（排水管掘り方）の調査を実施した（第 14 図灰色部分）。調査区は、臨床研究棟西側隣接地を主体とし、臨床研究棟北側、臨床研究棟南側である。以下、臨床研究棟北側の大型排水槽から臨床研究棟西側の通路までの東西配管掘り方を 2 区北部東西調査区、臨床研究棟西側の南北配管掘り方を 2 区南北調査区、臨床研究棟南側の東西配管掘り方を 2 区南部東西調査区とする。

2 区北部東西調査区は、長さ約 4 m、幅約 0.7 m の規模で、深さは東端で約 1.2 m、西端で約 1.0 m である。調査区東端から西へ 1.8 m までは隣接地の大型排水槽掘り方で、調査区の中央部を中心に兵器支廠造成土と推定される堆積層が良好に残されていた。兵器支廠造成土は橙褐色～淡黄褐色真砂土を主体とし、大きく 2 枚に区分できる。上層は締りが良く、下層は軟質で、角礫を多く含んでおり、西半部は長さ 30cm 程度の大型礫が



第 14 図 臨床研究棟改修工事調査区位置図 (1 : 300)

多数包含されていた。調査区西部は、兵器支廠造成土上部が削平を受けていた。造成土下半部の角礫は長さ 30cm 以上の大型礫を主体としていた。

2 区南北調査区は、長さ約 30 m、幅 0.7 m の規模で、北端で深さ約 1 m、中央部で約 0.7 m、南端で約 0.35 m まで掘削した。また、南北調査区北端から南へ約 4.7 m 付近から南へ約 18 m の間は、既設排水管に接続するための排水管掘り方を平行して掘削するため、掘り方の幅を 0.7 m から 1.2 m に拡張した（拡張部の深さ約 0.55 m 程度）。アスファルト基礎砕石層の下層（地表下 0.25 ～ 0.3 m 以下）は兵器支廠造成土が良好に残されていた。造成土の堆積状況は、1 区と基本的に同様であるが、上層の締りの良い堆積層は北端から南約 1.4 m 付近から急速に薄くなり、北端部から約 1.4 m 以南では厚さは 0.2 m 前後である。下層の堆積層は基本的に大型の角礫・亜角礫を包含しているが、礫の集中度が高いのは北端部で、上層の締りの良い堆積層の厚い箇所とほぼ一致している。

南北調査区中央部で列石遺構を確認した（第 14 図の A、写真 14）。切石を水平に配置したもので、東西方向に配置された 2 点を確認した。1 点は調査区内、1 点は西壁断面に露出し、大半は調査区外に位置する。調査区内の 1 点はバックホウによる掘削中に露出し、撤去されたため、現位置での記録はできなかった。切石の大きさは、長さ 36cm、幅 32cm、厚さ 27cm である。断面の切石は下半部が埋まっているため大きさを確認できなかった。



写真 10 臨床研究棟改修機械設備工事調査区
全景（南より）



写真 11 臨床研究棟改修機械設備工事 2 区北
部東西調査区掘削状況（東より）



写真 12 臨床研究棟改修機械設備工事 2 区南
北調査区中央～南部完掘状況（北より）



写真 13 臨床研究棟改修機械設備工事 008 2
区南北調査区中央部掘削状況（北より）



写真 14 臨床研究棟改修機械設備工事 2 区
南北調査区中央部列石遺構検出状況
（東より）



写真 15 臨床研究棟改修機械設備工事 2 区南
部東西調査区掘削状況（東より）

たが、幅 35cm で、撤去された切石と同規模と推定される。このほかにも、原位置を遊離した切石 1 点を確認している。

2 区南部東西調査区は、長さ 5.4 m、幅約 0.7 m、深さは約 0.3 m の規模である。堆積層は臨床研究棟建設時に工事埋積土と考えられる。

なお、1 区については、当初立会調査予定であったが、掘削深度が 0.4 m 以下に変更になったため、立会調査は実施しなかった。

4) 総合研究棟東側道路排水補修工事

所在地 広島市南区霞一丁目 2 番 3 号

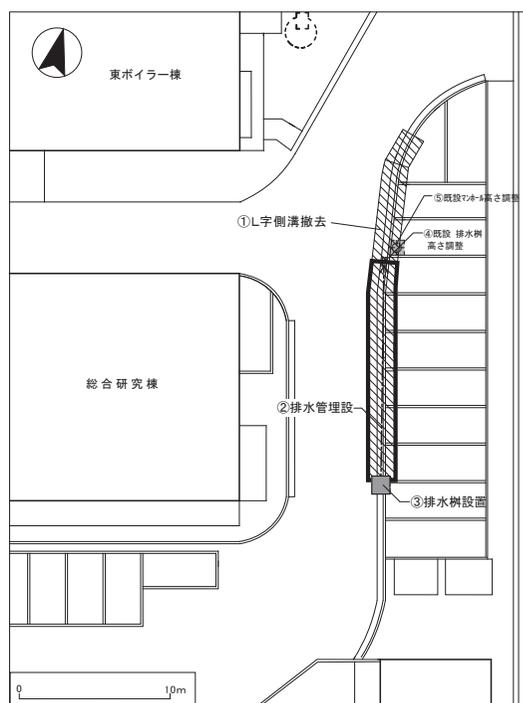
調査期間 平成 28 年 2 月 20 日

調査面積 40.5 m²

調査者 藤野次史

調査概要 総合研究棟東側道路排水補修工事に伴って立会調査を実施した。舗装のはぎ取りと同時に既設側溝、コンクリート縁石を撤去した（写真 17）。既設側溝の撤去範囲の総延長は約 15 m である。次いで、新設の排水管敷設のための掘り方を幅約 0.9 m、深さ約 0.6 m の規模で掘削した。さらに、調査区南端に雨水排水柵を設置するため、南北 1.1 m、東西 1.1 m、深さ約 1.1 m の掘り方を掘削した（写真 18）。今回の工事に伴う掘削範囲は基本的にすべて第二次世界大戦後の工事に伴う堆積土と判断される。

また、新設排水路の高さに合わせて隣接の 2 ヶ所のマンホール上面の高さを調整した。このため、マンホール設置部分の舗装を撤去した（写真 19）。



第 15 図 総合研究棟東側道路排水補修工事
平面図 (1 : 500)

(①L字型側溝撤去、②排水管埋設、③排水柵設置、④既設排水柵高さ調整、⑤既設マンホール高さ調整)



写真 16 総合研究棟東側道路排水補修工事調査区全景（北西より）



写真 17 総合研究棟東側道路排水補修工事雨水排水樹・排水管掘り方上の縁石・舗装撤去状況（南より）



写真 18 総合研究棟東側道路排水補修工事雨水排水樹掘り方コンクリート塊（板）出土状況（東より）



写真 19 総合研究棟東側道路排水補修工事既存電気樹掘り方掘削状況（南より）

東千田地区（広島市）

1) 知的人材育成センター新営工事

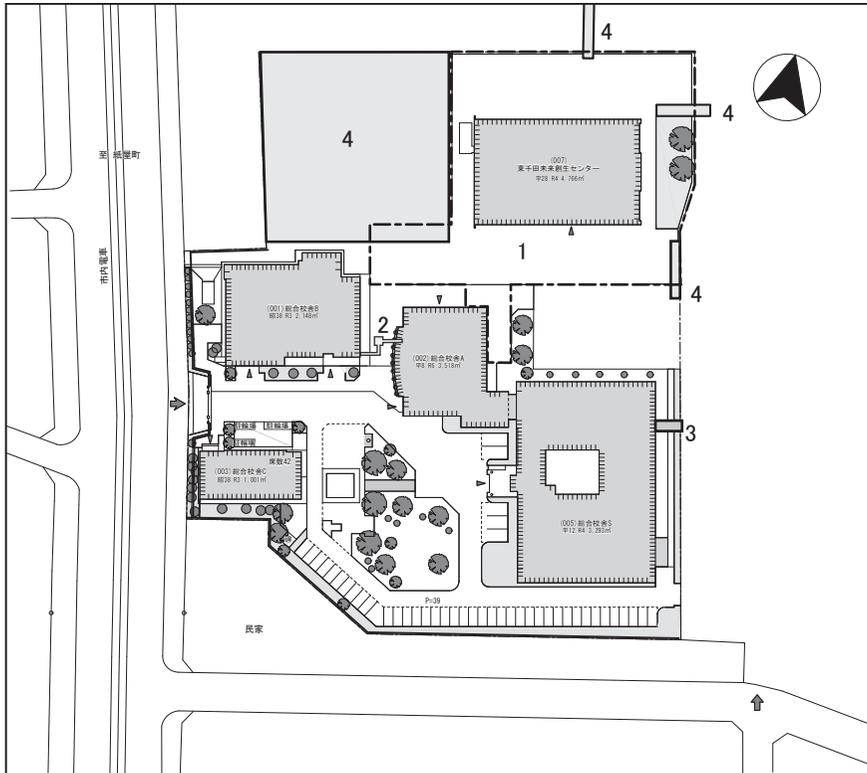
所在地 広島市中区東千田町一丁目1番89号

調査期間 2015年5月20日、8月4日・5日・10日・18日・19日、11月19日・24日～27日・30日、12月1日

調査面積 約2,921.5㎡

調査者 藤野次史、石丸恵利子、大近美穂

調査概要 知的人材育成センター新営工事（正式には未来創造センターと呼称されることとなった）に伴って立会調査を実施した。知的人材育成センター新営工事は昨年度からの継続事業であり、本年度は建物周囲の外構工事に伴って立会調査を実施した。昨年度



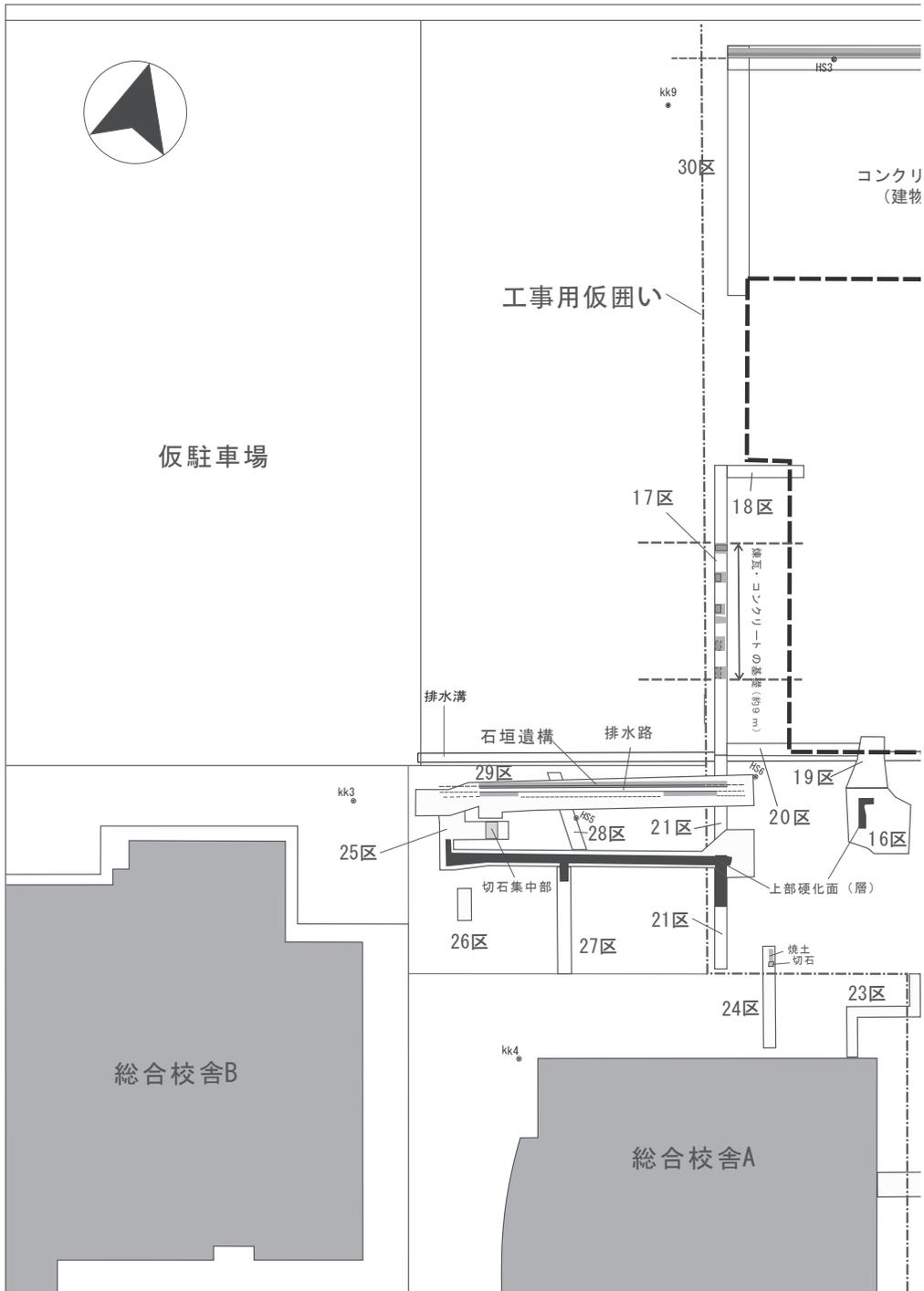
第 16 図 2015 年度東千田地区の立会・試掘調査位置図 (1 : 2000)

(1. 知的人材育成センター新営工事、2. 知的人材育成センター外構工事、3. 広島ナレッジシェアパーク、スマートコミュニティ構築工事、4. 駐輪場取設その他工事)

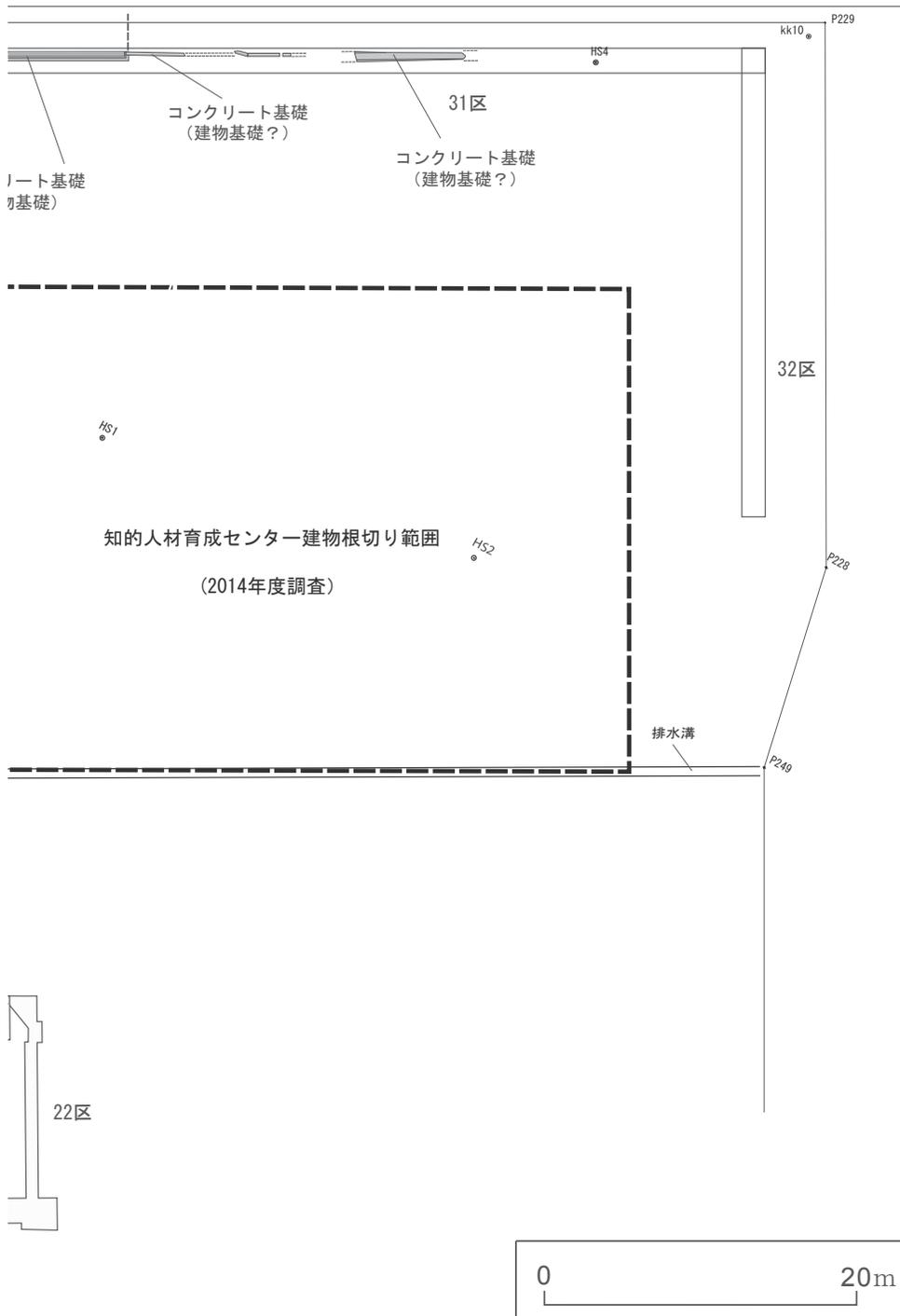
の試掘・立会調査において 1～15 区の調査区を設定したことから、今年度は 16 区から調査順に調査区名を付した (第 17 図)。

16・19・20 区 知的人材センター建物南西部に隣接して設定した調査区で、電気配管工事に伴うものである。16 区は 2 基の電気ハンドホール掘り方で、南北にハンドホール掘り方を連ねて掘削した。19・20 区は 16 区北側の電気配管掘り方である。

16 区の 2 基のハンドホール掘り方は南北に設置して配置した。南側と北側の掘り方は東西方向にずらして配置した。東西約 4.0 m、南北約 4.3 m の規模で、地表下約 1.2 m まで掘削した。北側のハンドホール掘り方では西端部で配管が露出したため東側へ約 1 m ずらして掘り下げた。2 面の硬化面 (層) を検出し、上部硬化面 (層)、下部硬化面 (層) とした (写真 21)。硬化面 (層) は土間のたたきに類似している。上部硬化面 (層) は地表下約 0.9 m で検出した。硬化面上には瓦細片、陶磁器片や木炭、焼土などを含んだ固く締まった土が堆積していた。調査区北端部は、調査区西端から約 2 m まで硬化面



第 17 図 知の人材育成センター新営工事
 (HS1 ~ HS6, KK3・4・9・10, P228.)



調査区と検出遺構配置図（1 : 450）
 229.249 は測量基準杭）



写真 20 知の人材育成センター新営工事 16 区
上部硬化面（層）検出状況（東より）



写真 21 知の人材育成センター新営工事 16 区
下部硬化面（層）検出状況（東より）



写真 22 知の人材育成センター新営工事 17 区
基礎 1～4 検出状況（南東より）



写真 23 知の人材育成センター新営工事 17 区
基礎 1・2 断面（東より）



写真 24 知の人材育成センター新営工事 17 区
基礎 3・4 断面（東より）



写真 25 知の人材育成センター新営工事 21 区
上部硬化面（層）検出状況（南より）

第3表 知的人材育成センター新営工事調査基準杭一覧表

基準点名	X	Y	H
HS1	-179902.512	26942.306	1.883
HS2	-179897.658	26966.876	
HS3	-179887.086	26920.452	1.740
HS4	-179866.044	26958.181	1.610
HS5	-179938.728	26929.957	
HS6	-179930.657	26938.875	
P229	-179887.195	26986.886	
P228	-179856.661	26969.779	1.328
P249	-179900.349	26989.671	
kk 3	-179944.839	26916.685	1.275
kk 4	-179954.339	26934.372	1.071
kk 9	-179894.985	26912.450	1.747
kk 10	-179866.044	26958.181	1.610

(測地系は日本測地系、座標系はⅢ系、単位はmである)

より下部は現状保存し、記録後埋め戻した。南側のハンドホール掘り方では硬化面等の遺構は検出されず、全て工事掘削等に伴う埋積土であった。

19区は平面台形状の調査区で、北端部が東西約1.5m、南端部が東西約2.8m、南北約3.3mの規模で、深さ約1.1mまで掘削した。全て工事掘削等に伴う埋積土であった。20区は、長さ(東西)約9m、幅約1m、深さ約1mの規模で掘削を行った。全て工事掘削等に伴う埋積土であった。

17区 知的人材育成センター建物の西側に位置し、排水管掘り方である。長さ(南北)約19m、幅約1m、深さ約1mの規模で掘削した。地表下約0.5mでコンクリート基礎5を検出した(写真22)。南側から順に基礎1、基礎2、基礎3、基礎4、基礎5と呼称することとした。基礎はいずれもコンクリート基礎の上に煉瓦基礎を構築している。基礎1は調査区南端から約5m北に位置する。煉瓦基礎は2段分(高さ約15cm)を確認でき、コンクリート基礎は幅(南北)80cm、高さ45cm以上(掘り方底面以下に基礎が続いているため規模不明で、以下の基礎も同様)である(写真23)。煉瓦基礎はコンクリート基礎幅のほぼ全体を使用して構築しており、幅約70cmである。基礎は東西方向に構築されており、調査区外に続いている。基礎2は基礎1の約1m北に位置する。煉瓦基礎は3段分(高さ約20cm)を確認でき、幅約60cmである。煉瓦積3段のうち最上段は幅46cmで、煉瓦をピラミッド状に構築していると考えられる。煉瓦基礎はコンクリート基礎の南端寄りに構築しており、煉瓦基礎の南端がコンクリート基礎南端の北約10cmに位置する。コンクリート基礎

が残されていたが、大半は調査区西端から1.3～1.5mより東側が削平されていた(写真20)。硬化面(北端部)の東端は約2cm低くなっており、一段低い部分の幅は約5cmである。硬化面の東側は全て工事掘削等に伴う埋積土であった。硬化部分は厚さ約5cmで、その下層に、黄色砂質土、灰褐色などの堆積層が認められた。下部硬化面(層)は上部硬化面(層)の約30cm下に位置する(写真21)。下部硬化面(層)が掘り方底面となることから、下部硬化面(層)

は幅 90cm、高さ 36cm 以上の規模である。コンクリート基礎、煉瓦基礎ともに東壁までは連続せず、途切れている。現状で、コンクリート基礎は長さ（東西）約 50cm である。基礎 3 は基礎 2 の北側 1.7 m に位置する。煉瓦基礎は 3 段分（約 20cm）を確認でき、幅約 60cm である（写真 24）。煉瓦積 3 段のうち最上段は幅 46cm で、基礎 2 同様、煉瓦をピラミッド状に構築していると考えられる。コンクリート基礎は幅 70cm、高さ 30cm 以上の規模である。コンクリート基礎、煉瓦基礎ともに東壁までは連続せず、途切れている。現状で、コンクリート基礎は長さ約 50cm である。基礎 3 の南側にはコンクリート基礎が続いている。調査区内では基礎 3 との間にわずかな空白部があり、東側に向かって厚さを減じ、東壁に達する手前で終わっている。西壁では幅約 100cm、高さ 30cm 以上の規模である。基礎 3 と一体的に構築された可能性があるが、コンクリート表面は凹凸があり、性格は不明である。基礎 4 は基礎 3 の北側 1.2 m に位置する。煉瓦基礎は 3 段分（高さ約 20cm）を確認でき、幅約 60cm である（写真 24）。煉瓦基礎はコンクリート基礎の中央に構築されており、煉瓦積の幅は等しく、目地が上下に通っている。コンクリート基礎は幅約 80cm、高さ 25cm 以上の規模である。基礎 5 は基礎 4 の北側約 1 m に位置する。煉瓦基礎は 3 段分（高さ約 20cm）を確認でき、幅 50cm である。コンクリート基礎は幅 85cm、高さ 25cm 以上の規模である。基礎 4・5 は東西方向に構築されており、調査区外に続いている。

基礎 1～5 は同一の建物を構成する基礎と考えられる。基礎 1・4・5 は東西方向に構築されており、南北約 9 m の東西建物と考えられる。基礎 2・3 は調査区東壁まで達せず途切れていることから、柱独立基礎と考えられる。検出位置に旧教育学部の建物は位置しておらず、基礎の構造からみても広島高等師範学校の建物基礎と考えられる。基礎掘り方は淡黄褐色砂質土（砂層）中に構築されていたが、基礎検出部分では淡黄褐色砂質土上部が削平されており、掘り込み面を確認することができなかった。しかし、基礎 4・5 周辺の淡黄褐色砂質土上の堆積層が残されている箇所などを参考にすると、淡黄褐色砂質土上面付近から構築されたと想定される。

17 区で検出した基礎と同様の構造の基礎を、東側の知的人材育成センター建物根切り掘削時（2015 年度）にも確認しており、今回検出した建物基礎が少なくとも知的人材育成センター建物根切り西部まで残されていたと想定される。2015 年度の立会調査では、旧教育学部建物の位置に該当していたため、煉瓦・コンクリート基礎の位置等の記録を行っておらず、詳細を明らかにすることができない。

18 区 17 区北端から東西方向に設定した調査区で、長さ（東西）約 5.1 m、幅約 1 m、深さ 0.5～0.8 m の規模で掘削した。遺構、遺物とも検出されなかった。

21 区 17 区を南側へ延長する形で設定した排水管掘り方である。長さ（南北）約 14 m、幅約 1 m、深さ約 1.2 mの規模で掘削した。北端から 5 ～ 8.3 mの範囲で硬化面（層）を検出した（写真 25）。硬化面（層）は 2 面あり、上部硬化面（層）の検出レベルは地表下約 1 mである。16 区で検出した上部硬化面と同様の状況であり、硬化面（層）上に、瓦片、陶磁器片、木炭などを含む硬く締まった土が 5cm 前後堆積していた。陶磁器の中に統制食器が認められ、構築は 1945 年（昭和 20）以前に遡る可能性がある。排水管掘り方は上部硬化面（層）から約 15cm 下部までの掘削であり、下部硬化面（層）まで達しないと推定されたことから、部分的に深掘りを行って下部硬化面（層）の確認を行った（写真 26）。16 区の上部硬化面（層）およびその下層と同様の堆積状況であった。

22 区 総合校舎 A 棟と知的人材育成センターの間の電気配管およびハンドホール掘り方の設置個所の南半分にあたり、総合校舎 A 棟の東側に位置する。南北配管掘り方は幅約 0.9 m、長さ約 13 m、東西配管掘り方は幅約 1.5 m、長さ約 3.5 mである。ハンドホール掘り方は東西約 2.5 m、南北約 2 mである。第二次世界大戦後の工事等に伴って埋積された堆積土で、遺構、遺物ともに検出されなかった。

23 区 消火管掘り方で、22 区西側隣接地である。平面樹形状を呈し、幅 0.7 m（接続管付近は幅約 1 m）、総延長約 10 mで、深さ約 1.1 mまで掘削した。第二次世界大戦後の工事等に埋積された堆積土で、遺構、遺物ともに検出されなかった。

24 区 排水管掘り方で、23 区の西側に位置する。幅約 0.9 m、長さ約 7 m、深さ約 0.8 mの規模で掘削した。地表下約 0.6 mで切石および焼土層を検出した（写真 27）。切石は調査区北端から約 1.2 m南に位置し、上面を水平に配置している。上面及び北側面が露出していたと考えられ、受熱痕跡が顕著であった。石の北側は切石上面まで焼土層が堆積し、切石上にも薄く堆積していた。焼土層は切石北側の調査区全体に広がっていたが、西半部は既存の排水管掘り方で削平されていた（写真 28）。焼土層の厚さは約 20cm である。調査区内で確認された切石は 1 点のみであったが、元々は東西方向に切石が連続的に配置されていた可能性がある。切石の下には栗石地業等の下部構造は認められず、水田層と思われる灰黒色砂質土上部に設置されていた。切石は上面が平行四辺形状を呈し、南北 29cm、東西 34cm、厚さ 22cm であった。

25 区 給水管（東部は電気配管と共用）掘り方で、知的人材育成センター建物の南西側に位置する。調査区は平面 L 字状を基本形とするが、掘削途上でルートが変更となったことから、やや不規則な平面形となった。最初に南北約 1.2 m、東西約 4.5 mの掘り方を地表下 1.2 mまで掘削し、掘り方西端で既設給水管を露出するとともに給水管布設の準備



写真 26 知の人材育成センター新営工事 21 区
下部硬化面（層）検出状況（南より）



写真 27 知の人材育成センター新営工事 24 区
切石・焼土層検出状況（北西より）



写真 28 知の人材育成センター新営工事 24 区
焼土層（南西より）



写真 29 知の人材育成センター新営工事 25 区
切石集中部検出状況（南西より）



写真 30 知の人材育成センター新営工事 26 区
東半部上部硬化面（層）検出状況（東
より）



写真 31 知の人材育成センター新営工事 25 区
西部上部硬化面（層）検出状況（南より）

を進めた。しかし、既設給水管は水道局へ届出した管種と異なっており、管の途中を切り取って分岐管を設置することができず、1 単位分の給水管を取り替える必要があることが判明したため、既設給水管沿い（南北方向）に幅（東西）1 mほど掘り方を拡張した。調査区南端部の既設給水管接合部から分岐させ、知的人材育成センター側の給水管まで東西約 20 m、南北約 1 mの配管掘り方を掘削した。最初に既設給水管露出のために掘削した掘り方の北部は排水樹が隣接しており、排水樹全体を露出させるため東西約 1.8 m、南北約 1.8 mに掘り方を拡張した。給水管掘り方東端部は知的人材育成センター側の給水管が確認できなかったため、南北約 4.5 m、東西約 3 mに拡張して掘削した。なお、最初に給水管掘り方とする予定であった部分については掘削を中止し、すべて埋め戻した。

最初に掘削した調査区東端部の地表下約 0.5 mで集石が検出した（写真 29）。7 点の切石が集中する状態であり、一部意図的に配置したように見える個所もあったが、規則的に切石を配置した状態ではなく、切石相互は密接しておらず、裏込めなどの構造も認められなかった。上部の切石を除去した段階で配管ルートが変更となったため、現状を記録して埋め戻した。

既設給水管沿いに拡張した調査区のうち、南側の拡張部全域において、地表下約 0.9 mで上部硬化面（層）を検出した。検出面が掘り方底であったが、既設給水管からの分岐付近は給水管取替え作業を行うため、約 1.2 mまで掘り下げ、硬化面（層）の一部を断ち割った。16 区上部硬化面（層）と同様の構造で、硬化層の厚さは約 5cm で、硬化層下に黄白色砂質土（マサ土）（厚さ約 5cm）、暗灰褐色砂質土（瓦片、炭化物混じり、厚さ約 15cm）の順に堆積していた。

給水管掘り方は幅約 1 mで、東端部で地表下約 1.2 m、西端部で地表下約 0.9 mまで掘削した。全面で上部硬化面（層）を検出した。検出面は地表下 1 m前後である。東端部は 21 区と重複しており、21 区で検出した上部硬化面（層）を再確認した（21 区調査後、盛土を行っており、地表からの深さは約 10cm 深い）。東から西に向かってバックホウで掘削した。給水管の長さに合わせて約 5 mごとに掘削範囲を清掃して記録を作成した。調査区中央部付近から西側では硬化面上に堆積する土層中に炭化物が多くなり、西部では硬化面上に炭化物層が薄く堆積している部分が認められた。上部硬化面（層）は掘り方底とほぼ同じ高さであり、調査区東端部を除いて、遺構の記録作業の後、埋め戻して工事を行った（写真 30）。調査区東部については上部硬化面（層）を 5cm 程度削平した。逆に、調査区西部では硬化面（層）上の堆積層（煉瓦細片、陶磁器片、炭化物などを含む）上面付近（写真 31）までの掘削でとどまった。

26 区 既設給水管確認のため設定した調査区で、25 区南側約 4.5 m に位置する。東西約 0.9 m、南北約 2.1 m、深さ約 0.7 m の規模で掘削を行った。調査区北端部の地表下約 0.45 m で切石 1 点を確認し、切石を残す形で掘り下げ作業を継続した。掘削途中で、25 区において給水管が確認されたため、掘削作業を終了し、埋め戻した。

27 区 25 区中央付近から南側の散水栓に向けて設定した給水管掘り方である。長さ約 7 m、幅約 1 m の規模で、地表下約 0.8 m まで掘削した。地表は南に向かって緩やかに傾斜し、散水栓の北側約 1.8 m 付近から法面状の傾斜地となっていることから、調査区南端部の掘削深度は約 0.3 m である。調査区北端の南約 1 m 付近から炭化物・灰の堆積層が始まっており、調査区南端の北 2 m 付近より南側では表土以外はすべて上記の堆積層である。ゴミ穴とも解釈できる状況ではあるが、調査範囲が狭く、今後の検討が必要である。上部硬化面（層）が 27 区にも広がっていたが、掘削が硬化面まで及ばないため、その広がりを正確に確認することはできなかった。北端から 1 m、および 2 m の地点を、0.2 × 0.2 m の規模で深掘りした。北から 1 m の地点では上部硬化面（層）を確認できたが、北から 2 m の地点では確認できず、地表下約 1 m で焼土層が露出した。焼土層は厚さ約 15 cm で、下層は暗灰色砂質土であった。

28 区 25 区中央付近から北側へ設定した電気配管掘り方である。調査区は幅約 0.9 m、長さ約 5 m で、深さは 0.8 m まで掘削した。大半は第二次世界大戦後の工事に伴う埋積土であったが、調査区北部では、地表下約 0.5 m 以下に黄褐色砂質土（真砂土か）が堆積していた。黄褐色砂質土が途切れる付近で石垣遺構を検出した。東西に配置され、南面する石垣遺構で、上下 2 段分を確認した。上段の切石は地表下約 0.5 m に位置し、下段の切石の大半は土中に埋まっている状態である。石垣遺構を検出した付近は、後述する 29 区と重複しており、29 区の調査によって石垣遺構の詳細が明らかとなった。

29 区 排水溝および排水柵掘り方で、25 区給水管掘り方の北側に位置し、28 区ほかの調査区と一部重複している。排水溝掘り方は長さ（東西）約 22.6 m、幅約 2 m、深さ約 1.2 m、排水柵掘り方は、東西約 2.5 m、南北約 2.4 m、深さ約 1.7 m の規模で掘削した。排水柵掘り方より東側の排水溝掘り方のほぼ全域で石垣遺構を検出した（写真 32・33）。現状で、東西約 16.2 m の規模である。石垣は 4 段布積であるが、石積 4 段を確認したのは排水柵掘り方部分のみで（写真 38）、そのほかは 3 段目上部までである。切石の大きさは幅 18 ～ 45 cm と不揃いで、あまり整った布積ではない（写真 34・36）。切石の高さは 28 ～ 35 cm で、幅に比べると規格性があり、各段の切石の高さはほぼ揃っている。石垣の南側に隣接して排水路を構築している。路床は石垣 3 段目（上から）上部に位置している。石



写真 32 知的人材育成センター新営工事 29 区
石垣・角柱状切石検出状況（東より）



写真 33 知的人材育成センター新営工事 29 区
石垣遺構全景（西より）



写真 34 知的人材育成センター新営工事 29 区
石垣遺構全景（南東より）



写真 35 知的人材育成センター新営工事 29 区
東部石垣遺構と排水路近景（西より）



写真 36 知的人材育成センター新営工事 29 区
西部石垣遺構と排水路近景（東より）



写真 37 知的人材育成センター新営工事 29 区
の石垣遺構石積状況（南より）

垣に沿って切石を東西に配置して排水路南側面とし、石垣との間に断面弧状で厚さ約 2cm のモルタル路床を構築している（写真 35・36）。排水路は幅 30cm で、深さは約 10cm である。排水路南縁沿いでは上層で断面大略正方形の棒状切石が 3 点出土した。棒状切石の断面は一辺 22cm 前後で、長さ 1.3 ～ 1.8 m である。平面的、垂直的にかなり移動しているものの、排水路に沿って東西に配列された様子を窺うことができ、元々は排水路南側面構成石であった可能性がある。この推定が正しければ、排水路の深さは本来約 30cm であったものと推定される。排水柵掘り方の構築のため排水路の一部を掘削し、掘り方壁面で排水路床の約 10cm 下層で先行する排水路床を確認した（写真 39）。下層排水路の幅は上層の排水路と同規模で、路床は石垣 3 段目の下部（排水路南側面を構成する切石の下底付近）に位置する。下層の路床は横断面の湾曲度がかなりきつい。

石垣は調査区西端から東へ約 20.3 m のところで上部 2 段が撤去されて、東側が失われていた。上から 3 段目の切石および排水路はさらに東側に約 1.7 m 続いていることを確認したが、その東側は確認できなかった。しかし、さらに 1 m 東側で原位置を保っている考えられる石垣構成切石（上から 2 段目）1 点を確認したことから、さらに東側にも石垣、排水路が残されている可能性がある。石垣の西側については調査区外に連続しており、西側に遺構が広がっていることが想定できる（本調査区西側隣接地の駐輪場取設その他工事地区で石垣遺構の続き部分が検出された）。

検出の石垣については施設グループと協議した結果、排水溝、排水柵掘り方を南側へ約 1.5 m ずらして設置し、保存することとなった。しかし、排水路南側面を構成する切石については、掘り方掘削深度内であることから撤去した。

30 区 排水溝掘り方で、知的人材育成センターの北西に位置する。調査区は、長さ約 15 m、幅約 1.4 m の規模で、地表下約 1 m まで掘削した。遺構・遺物とも出土しなかった。堆積土の大半が工事に伴う埋積土で、旧教育学部建物解体に伴うものと推定される。

31 区 排水溝掘り方で、知的人材育成センターの北側に位置する。長さ約 60 m、幅約 1.5 m の規模で、地表下約 1 m まで掘削した。地表下約 0.5 m で建物基礎を検出した（写真 40）。調査区西部では上下 2 段に構築したコンクリート基礎を検出した（写真 43）。現状で東西約 20 m の規模で、西側は調査区外に広がっている。コンクリート基礎上段は上面が平坦で、現状で幅（南北）50cm 前後、高さ約 20cm の規模である。下段は平坦面の幅 15cm 前後で、高さは約 10cm 以上（下層に続いており、規模は不明）である。コンクリート基礎が北側にどの程度の広がりを持つのか不明であるが、建物外縁の布基礎であると仮定すると、下段のコンクリート基礎の幅（南北）は 130cm 以上である。基礎上面はモルタ



写真 38 知の人材育成センター新営工事 29 区
石垣遺構下部露出状況（南より）



写真 39 知の人材育成センター新営工事 29 区
下部排水路床面検出状況（南西より）



写真 40 知の人材育成センター新営工事 31 区
建物基礎検出状況（西より）



写真 41 知の人材育成センター新営工事 31 区
建物基礎検出状況（東より）



写真 42 知の人材育成センター新営工事 31 区
西半部建物基礎検出状況（東より）

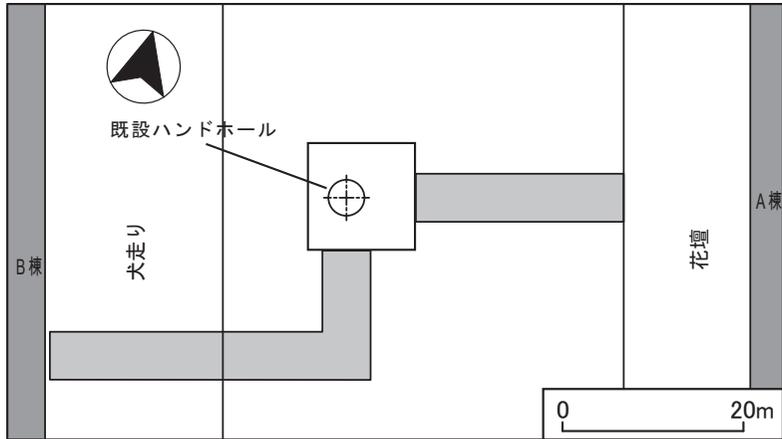


写真 43 知の人材育成センター新営工事 31 区
西半部建物基礎検出状況（南西より）

ル仕上げで、上段の平坦面上に煉瓦を東西方向に2列以上積んでいる。最も残りの良い箇所では3段の煉瓦積を確認した。コンクリート基礎の上に煉瓦基礎を構築しているものと推定されるが、大半は調査区外に位置していることから、詳細を明らかにできない。コンクリート基礎東端に接続する形で幅約20cmのコンクリート基礎が東西方向に構築されていた(写真42)。途中3.4mほど削平されているが、全体で東西約10m分を検出した。さらに東側に続いていたものと推定され、後述するコンクリート基礎に接続していた可能性がある。調査区西端から約35m東で建物基礎と考えられるコンクリート基礎を検出した(写真41)。調査区西部のコンクリート基礎下段上面とほぼ同じ高さに位置しており、幅(南北)約0.8mで、東西3.6m分を検出した。断面は低い台形状で、南北縁辺部が面取り状に傾斜している。コンクリート基礎の南縁は調査区西部のコンクリート基礎下段の南縁辺の延長線とほぼ一致している。

32区 排水溝掘り方で、知的人材育成センターの東側に位置する。長さ約28m、幅約1.5mの規模で、地表下約0.8mまで掘削した。上部約50cmは黄褐色マサ土層で、旧教育学部建物撤去後の盛土である。その下層は暗褐色土で比較的軟質の層であった。遺構・遺物ともに検出されなかった。

最後に、検出の遺構について簡単にまとめておきたい。今回の調査では、建物跡基礎、石垣遺構、硬化面(層)などを検出した。建物跡基礎は17区と31区で検出した。17区の建物基礎は1棟分と考えられ、東西建物である。コンクリート基礎の上に煉瓦基礎を構築している。31区検出の建物は基礎は2棟分以上の建物である可能性が高い。調査区西部の建物基礎は西側が調査区外に続いており、調査区内では東西約20m分を検出した。17区の建物基礎と同じく、コンクリート基礎の上に煉瓦基礎を構築する構造である可能性が高いが、17区の建物基礎に比べると、かなり規模が大きい。東西建物で、17区の建物と平行して構築されている。この建物基礎東端に接続する形で幅約20cmのコンクリート基礎が東西方向に構築されており、何らかの付属の建物が存在したものと考えられる。東西10m以上の規模である。調査区中央部では幅約0.8m、東西約3.6mのコンクリート基礎を検出した。検出面は31区西部のコンクリート基礎下段上面とほぼ同じレベルであり、建物布基礎の可能性もある。石垣遺構(29区)は建物群の南側に位置し、建物群の東西軸に平行して構築されている。石垣に隣接して排水路が構築されており、改修によって構築時の路床が約10cm嵩上げされている。硬化面は16区、21区中央部、25区東西調査区などで検出した。排水路の南側に位置しており、南北4m以上の幅で東西方向に広がっていると推定される。上部硬化面(層)は排水路南側面の切石上面とほぼ同じ高さであり、道



第 18 図 知の人材育成センター外構工事調査区配置図



写真 44 知の人材育成センター外構工事調査区全景（北より）



写真 45 知の人材育成センター外構工事調査区東部掘削状況（西より）



写真 46 知の人材育成センター外構工事調査区完掘状況（南東より）



写真 47 知の人材育成センター外構工事調査区西部完掘状況（南東より）

路（通路）の可能性が高い。

今回の調査成果にもとづくと、石垣遺構を境に敷地に段差があったことが想定される。段の比高差は約 50cm で、石垣沿いには排水路が布設され、その南側には排水路（石垣）に平行して道路（通路）配置されていたことが想定される。石垣の北側には東西建物が南北に並列的に配置されている。これらの建物は旧広島高等師範学校の一部に相当すると考えられる。旧広島高等師範学校の建物配置図は「広島高等師範学校一覧」などによって知ることができる。調査地点は旧広島高等師範学校敷地の西南部にあたり、17 区および 31 区の建物は高等師範学校寄宿舎（自習室兼寝室）に比定できる可能性がある。今回の調査では、建物基礎の規模、構造の一部が明らかとなったにすぎないことから、今後の調査をまってさらに十分な検討を行いたい。

2) 知的人材育成センター外構工事

所在地 広島市中区東千田町一丁目 1 番 89 号

調査期間 2015 年 8 月 18 日、8 月 19 日

調査面積 約 8 m²

調査者 藤野次史

調査概要 知的人材育成センター外構工事に伴って立会調査を実施した（第 11 図）。



第 19 図 広島ナレッジシェアパーク、スマートコミュニティ構築工事調査区配置図（1 : 400）

ハンドホールの東側は東西に細長い調査区で、長さ約 4.5 m、幅 0.8 m、深さ 0.95 ～ 1.15 m の規模で掘削を行った（写真 45・46）。ハンドホールの西側は平面 L 字形の調査区で、東西方向と南北方向を合計した調査区の規模は、長さ約 6.8 m、幅 0.8 m で、深さ 0.9 ～ 1.1 m の掘削を行った（写真 47）。舗装碎石層以下はすべて第二次世界大戦後の工事に伴う埋積土と判断される堆積層であった。

3) 広島ナレッジシェアパーク、スマートコミュニティ構築工事

所在地 広島市中区東千田町一丁目 1 番 89 号

調査期間 2015 年 12 月 3 日

調査面積 15.41 m²



写真 48 広島ナレッジシェアパーク、スマートコミュニティ構築工事調査区西部掘削状況（南より）



写真 49 広島ナレッジシェアパーク、スマートコミュニティ構築工事調査区西部完掘状況（東より）



写真 50 広島ナレッジシェアパーク、スマートコミュニティ構築工事調査区東部南壁堆積状況



写真 51 広島ナレッジシェアパーク、スマートコミュニティ構築工事調査区東部南壁中央煉瓦・瓦片包含層および灰黒色砂質土ほか堆積状況（遺物出土状況）

調査者 藤野次史

調査概要 広島大学東千田地区広島ナレッジシェアパーク、スマートコミュニティ構築工事(電気工事)に伴って立会調査を実施した。東西 6.7 m、南北 2.3 m、西端部で深さ 2.5 m、東端部で深さ 1.4 m の規模で掘削した(第 19 図、写真 48)。西端から約 2 m までは建物基礎埋土と考えられる暗灰褐色～暗褐色土が主体であった。西端から約 2 m より東側では、舗装、碎石層の下層に、煉瓦、瓦片混じり黄褐色真砂層、灰黒色砂質土、淡灰褐色砂質土、淡灰褐色粘質土(締まる)、暗青灰色砂質土(砂層)、灰白色砂層、暗青灰色砂層の順に堆積層が認められた(暗青灰色砂質土(砂層)上面で地表下約 1.8 m)。煉瓦・瓦片混じり黄褐色真砂層は約 40cm の厚さがあり、厚さ 1cm 程度の赤褐色層(焼土層?)を挟みながら大きく 3～4 枚区分される。広島高等師範学校に関連する堆積層を含んでいると推定される。また、調査区西端から 2～4 m の間には排水管が付設されており、煉瓦・瓦片混じり堆積層は失われていた。下層の灰黒色砂質土中から近世後期～近代(近世後期～明治前期か)の磁器 2 点が出土した(写真 51)。

4) 駐輪場取設その他工事

所在地 広島市中区東千田町一丁目 1 番 89 号

調査期間 2015 年 12 月 16 日・18 日・21 日・22 日、2016 年 1 月 7 日・8 日・12 日・13 日・15 日・18 日、2 月 4 日・8 日・29 日、3 月 1 日・18 日

調査面積 約 2,980 m²

調査担当 石丸恵利子、大近美穂

調査概要 東千田キャンパスにおける「東千田未来創生センター」周辺の樹木撤去(1・2 区)や駐輪場(5～8 区)、透水柵(3・4・9 区)、車止め(10～13 区)、ハンドホール取設(14 区)などの整備事業に伴う工事で、延べ 15 日間の立会調査を実施した。

調査範囲での土壌堆積は、地表下約 1 m に 1 層:表土(黒灰褐色土)、2 層:造成土(真砂土)、3 層:埋め戻し土(黒褐色土・暗い褐色土、煉瓦や瓦などを含む)、4 層:砂層(黄褐色土・黒褐色土)を基本層序とする状況が確認された。2～6・9・10・14 区において、広島高等師範学校に関連する建物基礎等の跡が確認された。1・7・8・11～13 区では遺構は確認されなかった。以下、調査区ごとに調査の概要を記す。

1 区 樹木撤去のための掘削である。径約 3.0 m の範囲を、地表下約 1.0 m まで掘削した。埋土は、前述の 1 から 3 層に相当し、遺構・遺物ともに確認されなかった。

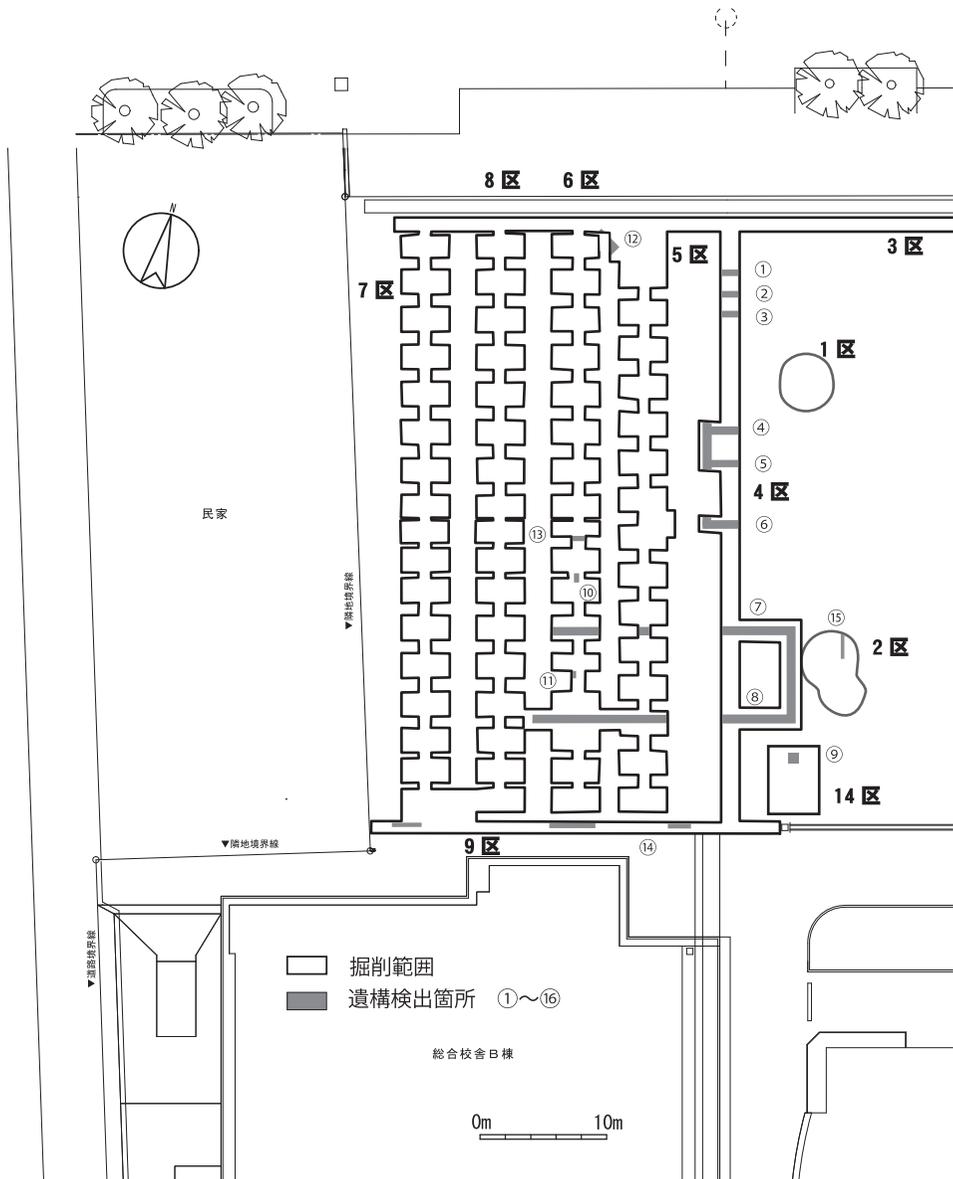
2 区 樹木撤去のための掘削で、北側は東西 5.0 m、南北 4.2 m を最も深い部分で約 1.3 m 掘削した。中央やや東側で地表下約 70cm の地点で南北に延びるレンガ列を 1 列 2.2 m

ほど検出した(第20図⑮)。北側は掘削範囲外にも延びると考えられる。南側については、さらに径2.0m程度の範囲を、樹木撤去に伴い約50cm程度しか掘り下げていないため、レンガ列が南側に延びるかは不明である。レンガ列は、長辺を接する小口積みで、一部1枚半の配列も確認できた。

3・4区 透水樹および側溝取設のための掘削で、3区は東西約30.0m、南北幅約1.1mを、また4区は南北30.0m、東西幅約1.0～1.5mの範囲を地表下1.0mまで掘削した。3区中央やや西よりの部分で南壁内に延びるレンガ積み樹(7段確認)と考えられる一部を確認した(第20図⑫)。側溝取設に影響はないため、現状のまま埋め戻された。4区ではコンクリート基礎と考えられる構造物を8ヶ所で確認した(北からコンクリート基礎①～⑧)。北から2つについては東側が壊された状態で、西側のみ調査区外にさらに延びると考えられるが、それ以外はいずれも東西方向に延びる。コンクリート基礎③と⑤は上面にレンガの積み上げが一部残っており、その他の基礎上にはレンガを積み上げたことを示すモルタルの痕を確認することができた。コンクリートにはこぶし大の円礫を含み、コンクリート下には人頭大の角礫が積まれている状態を確認した。いずれのコンクリート基礎も側溝取設の支障になることから取り壊されるため、コンクリート基礎④～⑧については、その端部を確認するために東西方向に拡張して掘削をおこなった。コンクリート基礎④⑤については、約1m西側に拡張した地点において、一段下がったレベルで垂直に交わるコンクリートが検出され、南側は基礎⑥と接続していることが明らかとなり、基礎⑥が南西隅にあたることが確認された。⑦⑧については、東側に約6mの地点で垂直に折れ曲がりつながっている状態が確認でき、部分的にレンガ積みが残されていた。長手積みと小口積みを交互に積んだ(長手積み1段・小口積み2段の繰り返しと長手積み1段・小口積み1段・長手積み3段が認められる)積み方を観察することができた。

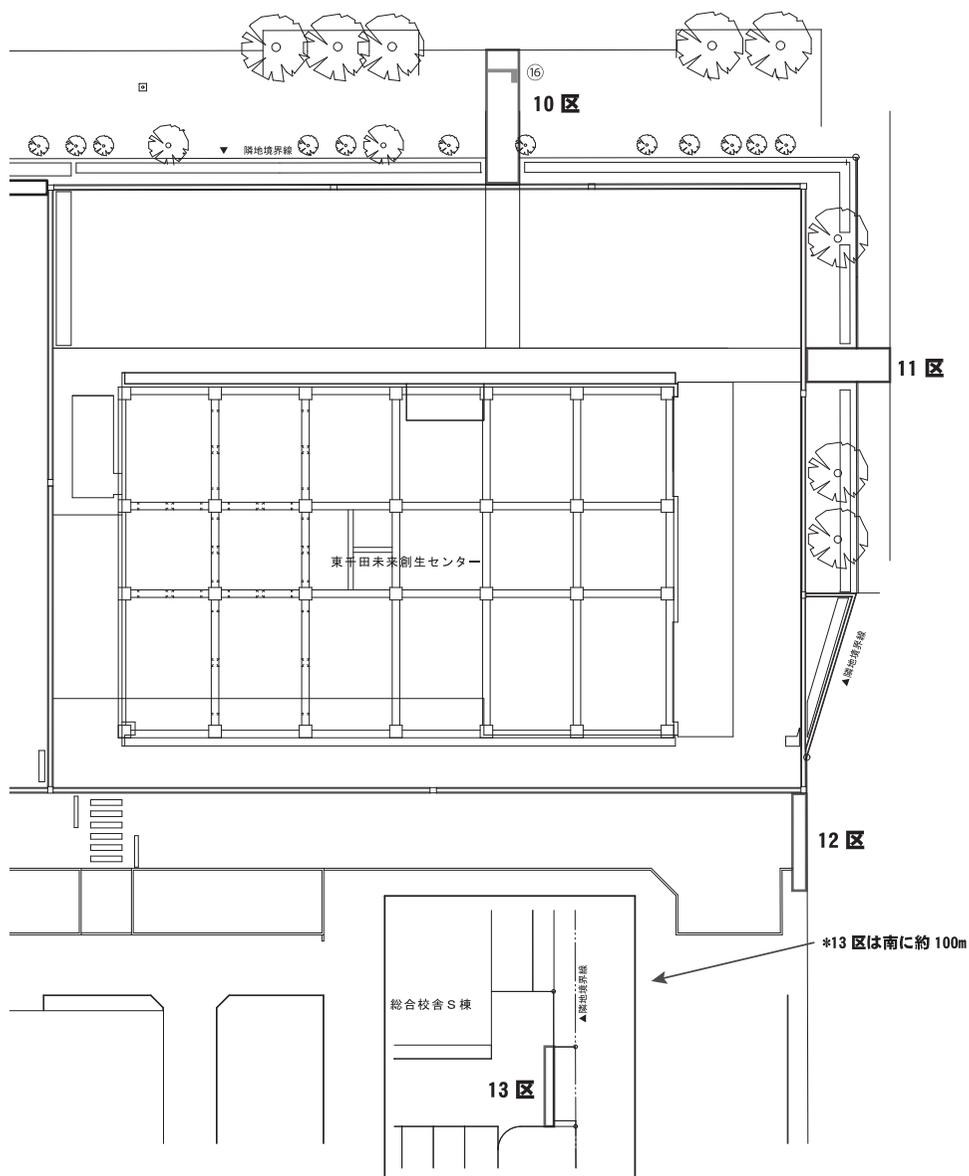
5～8区 駐輪場屋根基礎取設のための掘削で、4区に平行して南北約30.0mの範囲を基礎設置場所で東西幅約2.5m、それ以外の部分(基礎間)は1.0m前後の幅で掘削した。

5・6区内では、コンクリート基礎⑦と⑧の延長部分が確認された。上面にレンガは残されておらず、レンガを積み上げたことを示すモルタルの痕跡のみ確認された。コンクリート基礎⑧の端部を確認するため、西側に拡張した結果、約3mまでが残されており、8区までは達していない状態であった。5区北端で、3区で検出されたレンガ積み樹の続きを検出し、1辺が2.5mの大きなレンガ積みの構造物であったことが明らかとなった(第20図⑫)。また、6区でレンガ積み樹を2基検出した。中央やや南側で検出した東西0.46m×南北0.7



第20図 駐輪場取設その他

m×4段のレンガ積み柵（レンガ柵②：第20図⑩）は、取り除かれる場所にあったため、保存のために取り上げた（東広島キャンパスに持ち帰り保存）。もう1基は東端（南北0.85m）を検出したのみで、取設に支障ないことから記録の後に埋め戻した（第20図⑪）。レンガ柵②の北側において、断面L字形のコンクリート構造物を検出した（第20図⑬）。何ら



工事調査区配置図 (1 : 600)

かの基礎の可能性もあるが用途不明である。

7区では、次に述べる9区と接した部分でコンクリート製の水槽のようなものが検出されたが、床面が簀子状になっており、用途は不明である。遺物は検出されなかった。8区では遺構・遺物共に検出されなかった。

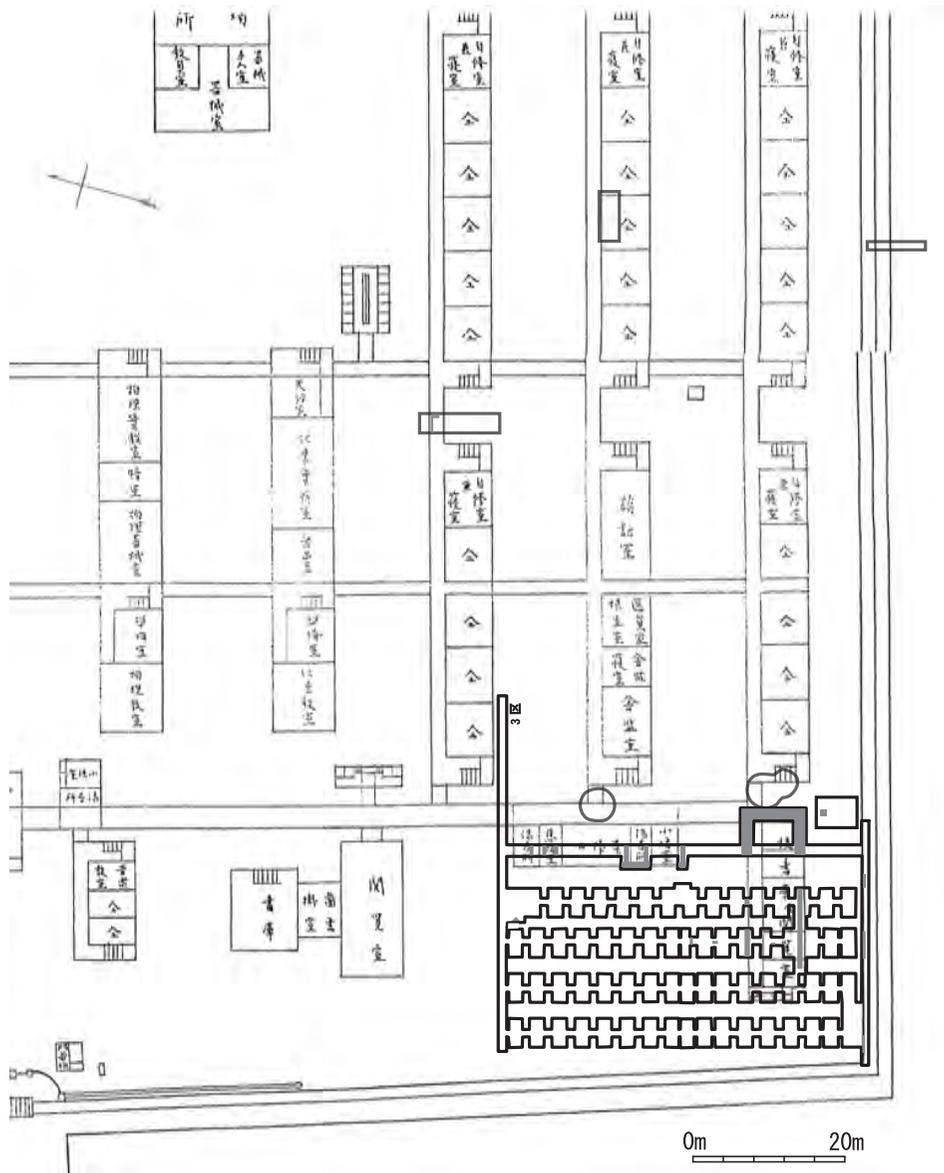
9 区 側溝取設のための掘削で、東西約 21.0 m、南北幅約 1.0 m の範囲を地表下約 1.0 m で掘削した結果、HS1501 調査で検出された石垣（46～48 頁参照）の続きと考えられる構造が断続的に 3 か所で確認された（第 20 図⑭）。部分的に壊されていたものの、最大 4 段を確認し、さらに下方に石が存在している（一部地表下 1.5 m まで掘り下げたがさらに下方に続き、1.3 m まで石垣を確認）。西端も調査区外（敷地外）に延びると考えられる。石積みは下方に続くが検出された石積みの上から 3 段目途中にモルタル敷の溝のようなものが確認され、さらに下方にもう 1 枚確認でき、HS1501 調査で検出された石垣の底面状況と共通する。石垣は側溝の位置を変更できないため、記録の後に取り除かれた。

10・11 区 車止め設置のための掘削である。10 区は南北約 11.0 m、東西約 3.0 m を、また 11 区は南北約 3.2 m、東西約 7.0 m の範囲を掘削した。10 区において、地表下 0.4 m の地点で東西方向に並ぶレンガ列（小口積み）を確認した（第 20 図⑯）。東端部分は南側にもレンガの配列が認められた。両側ともに調査区外に延びる。これ以上深く掘削は行われなため、現状のまま埋め戻された。11 区では遺構・遺物ともに検出されなかった。

12・13 区 いずれも車止め設置のための掘削である。12 区は、南北約 7.5 m、東西約 1.0 m の範囲を地表下 0.8 m まで掘削したが、いずれも既設柵設置時の埋土内であった、13 区は、南北約 6 m、東西約 0.8 m の範囲を地表下約 1.0 m まで掘削した結果、西壁面で大型の切石を確認した。切石 1 点が確認されたのみであるため、原位置を届けているのか、または構造等は不明であるが、切石を境に埋土が異なっているため、原位置をとどめている可能性が高い。

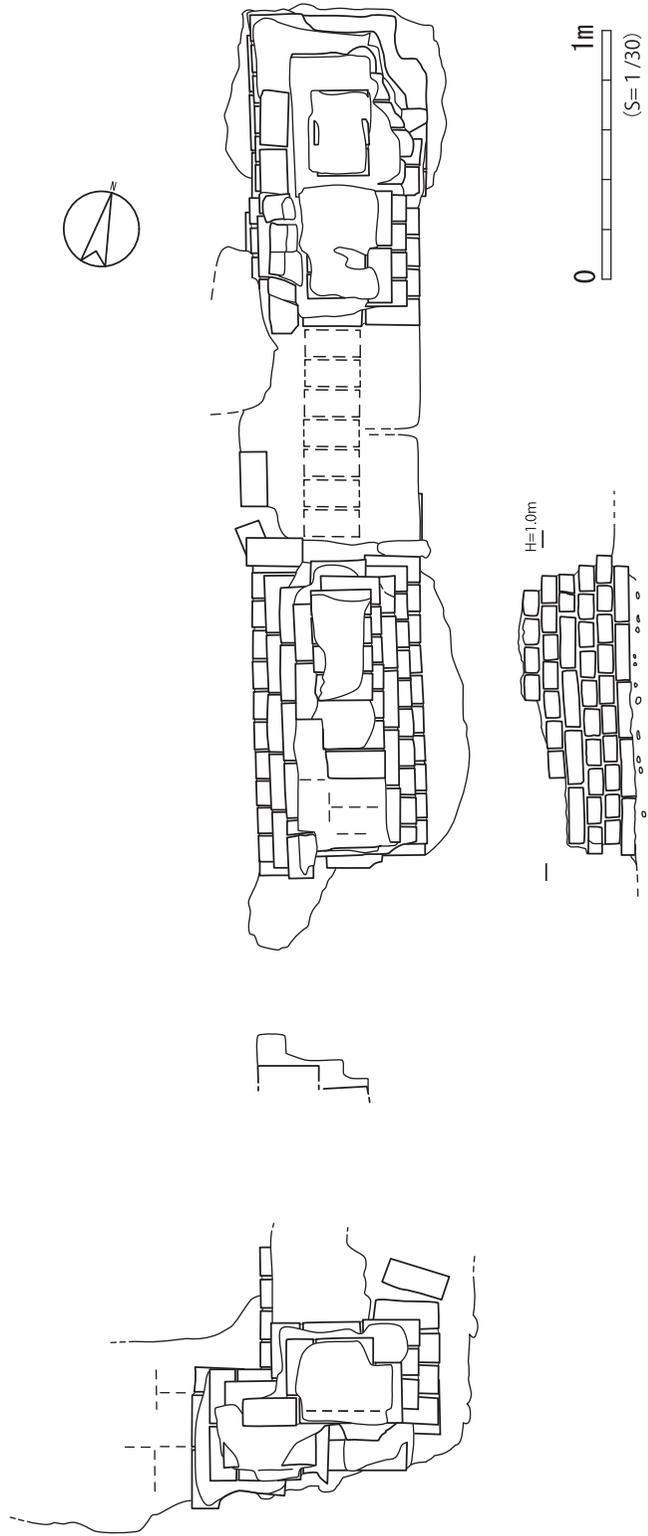
14 区 ハンドホール取設のための掘削で、当初透水柵北側約 2 m 部分を地表下 1.2 m まで掘削した。その際、東西 0.7 m のレンガ積み柵（レンガ柵①：第 20 図⑨）を 1 基検出したが、施工に支障がないことからそのまま埋め戻される予定であった。しかし、そののち取り付け場所が北側に変更されたことや上部がすき取られる可能性があったため、レンガ柵②同様に取り上げて保存することとした。

以上の立会により、建物基礎と考えられるコンクリート構造物やレンガ積柵が検出された。これらの位置を広島高等師範学校配置図（『広島高等師範学校一覧』明治 37 年～大正 10 年）と比較したところ、コンクリート基礎⑦⑧は「仮書庫及閲覧室」の東端の位置と一致し、コンクリート基礎④から⑥は「昇降口・湯呑所・小便室」の位置と重なることが明らかとなった（HS1534 調査地点平面図と広島高等師範学校配置図）。コンクリート基礎①から③も、それにつづく建物基礎であったと考えられる。また、石垣の位置は敷地境にあたることも確認できた。10 区のレンガ配列についても、建物の渡り廊下部分と一致することが明らかとなっ



第 21 図 広島高等師範学校建物配置と駐輪場取設その他工事調査区的位置 (1 : 1000)

た。また、当時の建物基礎構造やレンガの積み方などの状況を示す貴重な遺構が検出されたと言える。以上のことから、広島大学移転前の校舎が建設されていない場所やその後の開発によって掘削が行われていない場所には、今も明治期の建物基礎などの遺構が残されている可能性が高いことが明らかとなり、今後も掘削深度が 0.4 m 以上の掘削においては立会調査の実施が必要である。



第 22 図 駐輪場取設その他工事基礎⑦⑧東端実測図



写真 52 駐輪場取設その他工事調査区全景
(東より)



写真 53 駐輪場取設その他工事 4 区南側建物
基礎検出状況 (北東より)



写真 54 駐輪場取設その他工事 4 区北側建物
基礎検出状況 (南より)



写真 55 駐輪場取設その他工事 4 区建物基礎
③検出状況 (南より)



写真 56 駐輪場取設その他工事 4 区建物基礎
④ (北より)



写真 57 駐輪場取設その他工事 4 区建物基礎④
⑤⑥検出状況 (北東より)



写真 58 駐輪場取設その他工事 4 区建物基礎
⑦⑧検出状況（南より）



写真 59 駐輪場取設その他工事 4 区建物基礎
⑦⑧検出状況（北西より）



写真 60 駐輪場取設その他工事 4 区建物基礎
⑦⑧中央部分（北東より）



写真 61 駐輪場取設その他工事 3 区レンガ組
み桝検出状況（東より）



写真 62 駐輪場取設その他工事 6 区レンガ組
み桝検出状況（西より）



写真 63 駐輪場取設その他工事 9 区石垣検出状
況（東より）

翠地区（広島市）

1) 食堂改修機械設備工事

所在地 広島市南区翠一丁目1番1号

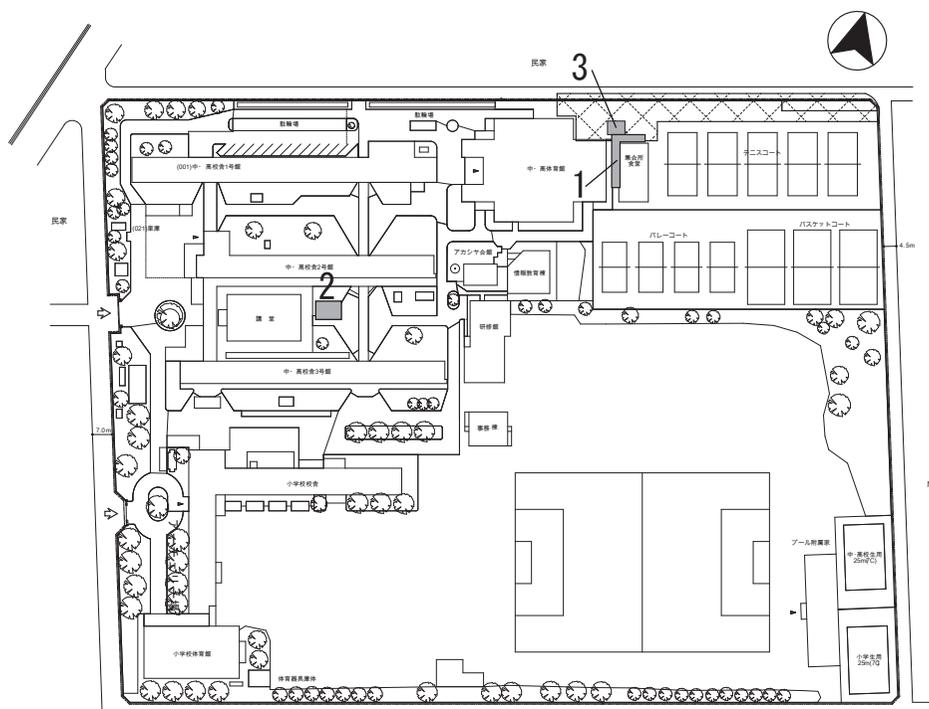
調査期間 2015年10月21日・22日

調査面積 16 m²

調査者 藤野次史

調査概要 広島大学附属学校部（翠地区）食堂改修機械設備工事に伴って立会調査を実施した。食堂西側の南北配管路掘り方を1区、北側の東西配管路掘方を2区、食堂手洗い西側の排水柵に接続する東西配管路掘り方を3区、3区から食堂手洗いに接続する東西配管路を4区、食堂手洗いに接する南北配管路を5区として調査した（第24図）。

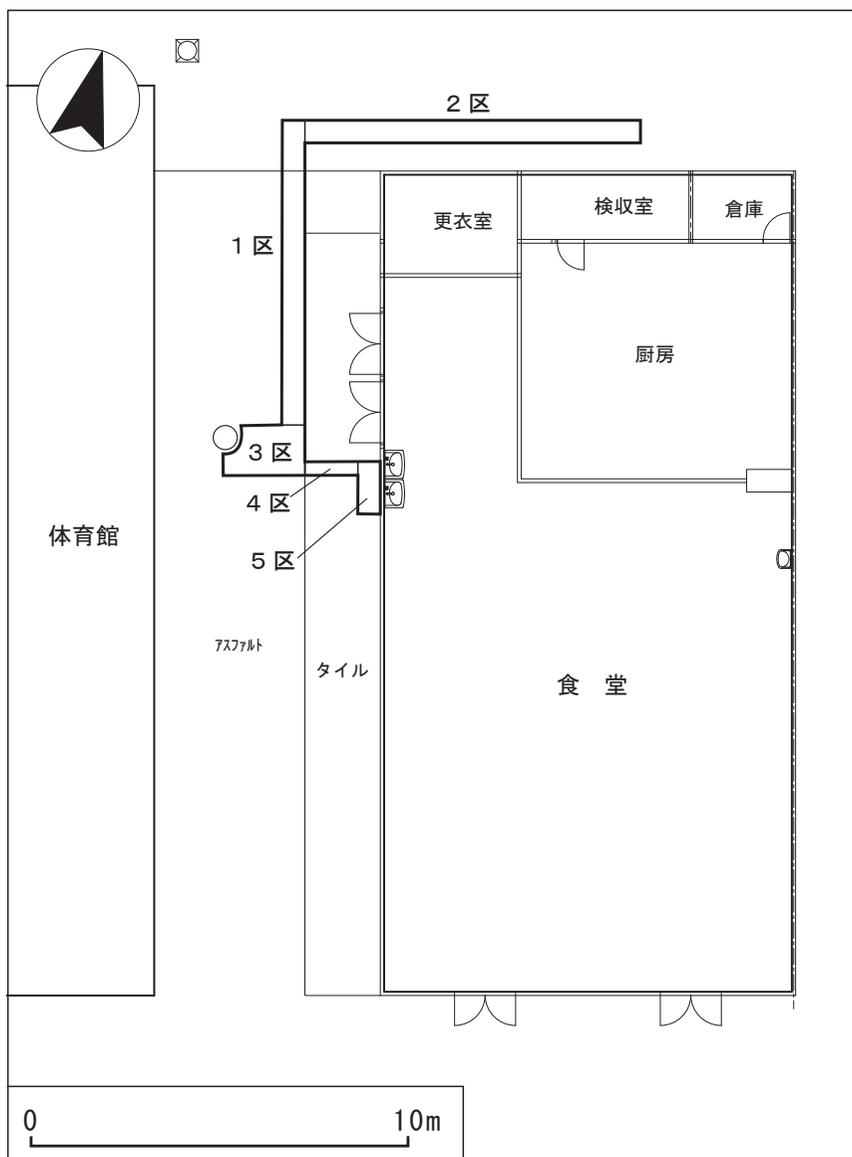
1区 長さ（南北）約14m、幅約0.5mの南北に細長い調査区である。舗装を含め、地表下約0.3mまで掘削した。北端部約1.5mは未舗装で、それ以外はコンクリート舗装である。コンクリート舗装の下層は、上層より、橙褐色砂質土（真砂土、北部では薄く灰



第23図 2015年度翠地区の立会・試掘調査位置図（1：3000）

（1. 附属学校部食堂改修機械設備工事、2. 講堂裏雨水排水改修工事、3. 中・高食堂廻り舗装改修工事）

褐色土が間に挟まり2層に細分可能)、暗灰褐色砂質土、黒褐色～黒灰色砂質土の順である(写真 65)。北端部は未舗装で、表土直下からほぼ垂直に掘り込まれた落ち込みを確認した。灰・炭混じりの灰黒色土と暗灰褐色土の互層が堆積しており、第二次世界大戦以後の磁器片が少量出土した。2区の鉄製柵、コンクリート壁に関連する掘り込みの可能性が高いが、2区を埋め戻したのちに検出したため、関連を十分確認できなかった。コンクリー



第 24 図 食堂改修機械設備工事調査区配置図 (1 : 200)



写真 64 食堂改修機械設備工事 1 区北半部完掘状況（北より）



写真 65 食堂改修機械設備工事 1 区北半部中央部西壁（東より）



写真 66 食堂改修機械設備工事 2 区西半部給水管布設状況



写真 67 食堂改修機械設備工事 2 区鉄製樹（南東より）



写真 68 食堂改修機械設備工事 3 区完掘状況（南西より）



写真 69 食堂改修機械設備工事 4・5 区完掘（南より）

ト舗装部分はほぼ同様の堆積状態であった。

2区 長さ（東西）約 5.3 m、幅約 0.5 mの東西に細長い調査区である。最初に食堂北壁面に置かれていた電気および給水管配管（8本）のルートを確認するため、建物沿いを掘削した。8本のうち電気配管2本が2区を横断していた。配管上面が地表下約 0.25 mにあり、電気配管の上に給水管を付設することとした。2区は東部で約 0.25 m、中央部で約 0.3 m、西部で 0.35 ～ 0.40 mの深さまで掘削した。東端から約 4 m西で鉄製の箱形の設備を検出した（写真 67）。上面が 30 × 30cm 正方形で、上部が内側へ潰れている状態であった。南側に鉄製配管が2本布設されていた。電気配管等に関連した柵あるいは管理ボックスのようなものと推定される（以下、鉄製柵）。鉄製柵の北側でコンクリート構築物を検出した。コンクリート構築物は東西約 1.35 m分を確認した。東端は破砕面であり、本来の規模は不明である。コンクリート壁は地表下 0.05 mに上面があり、鉄製柵上面は地表下 0.10 ～ 0.15 mに位置する。鉄製柵の折れ曲がった部分から元の状態を推定すると、上面はほぼ現地表面となる。現地表面付近から掘り込んで構築したものと推定される。第二次世界大戦後に設置されたものと推定されるが、時期は不明である。2区の堆積層は工事埋積土を主体とし、暗褐色～暗灰褐色砂質土などである。

3区 東西 2.1 m、南北 1.25 mの長方形の調査区である。北西端部に排水柵が位置しており、排水柵から東側の4区に向けて南東方向に排水管が布設されていた。排水管を中心とする幅 0.5 mについて深さ約 0.4 mまで、その他は約 0.3 mまで掘削した（写真 68）。調査区東端部で1区の基本層序を確認した他は、工事埋土と思われる暗灰褐色砂質土であった。

4・5区 食堂西側のコンクリート・テラスに位置する。4区は長さ（東西）1.3 m、幅約 0.4 m、深さ 0.4 m、5区は長さ（南北）1.2 m、幅 0.6 m、深さ 0.4 mの規模で掘削した（写真 69）。コンクリートの厚さは 15 ～ 20cm で、コンクリートの下層は、橙褐色砂質土（真砂土）、黒青灰色砂質土（10cm 前後の円礫、角礫を多く含み、鉄筋片、木片などが出土した）、褐色～暗褐色砂質土の順で堆積が認められた。橙褐色砂質土は盛土（整地土）と推定される。

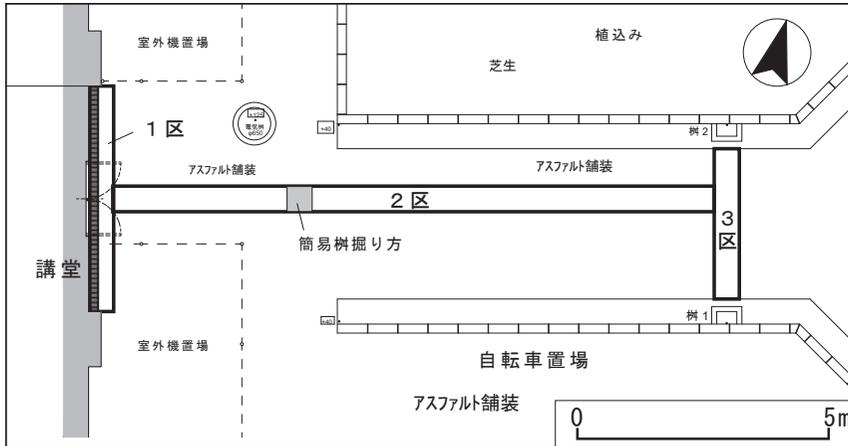
いずれの調査区においても、遺構、遺物とも検出されなかった。

2) 講堂裏雨水排水改修工事

所在地 広島市南区翠一丁目1番1号

調査期間 2015年7月29日・31日

調査面積 約 10 m²



第 25 図 講堂裏雨水排水改修工事調査区配置図 (1 : 150)



写真 70 講堂裏雨水排水改修工事 1 区完掘状況 (北東より)



写真 71 講堂裏雨水排水改修工事 2 区中央部～西部南壁堆積状況 (東より)



写真 72 講堂裏雨水排水改修工事 2 区中央部～東部南壁堆積状況 (北西より)



写真 73 講堂裏雨水排水改修工事 3 区西壁堆積状況 (南東より)

調査者 藤野次史

調査概要 講堂沿いの雨水排水溝改修のための掘り方を1区、排水溝から排水するための東西排水管の掘り方を2区、南北に位置する既設排水柵をつなぐ南北排水管掘り方を3区とした（第25図）。

1区 長さ（南北）4.5 m、幅約0.5 m、深さ0.4 mの規模で掘削した（写真70）。講堂に接して既設排水溝があり、講堂基礎に接する排水溝の西側コンクリート壁を残して掘削を行った。既設排水溝は掘り方を含めて幅約0.4 m、深さ約0.25 mであった。既設排水溝以外はアスファルト舗装が行われており、舗装および下層の碎石層の厚さは約0.15 mである。舗装碎石層以下は、暗灰褐色砂質土、黒色土、暗黄褐色～暗橙褐色砂質土（固く締まる）の順で堆積していた。北端から約3.5 m以南は堆積層の細分は困難で、全体に灰褐色系砂質土が堆積し、比較的軟質であった。1区南端部は講堂柱部に隣接しており、講堂柱掘り方の埋積土かもしれない。

2区 長さ（東西）約12 m、幅約0.5 mの規模で掘削した。深さは、西端部で約0.4 m、簡易柵の付近で約0.6 m、東端で約0.9 mの掘削を行い、西から東に向かって順次深さが深くなるように掘削した。調査区西端から約3.5 mに位置する簡易柵掘り方は、東西約0.6 m、南北約0.5 m、深さ約0.8 mの規模で掘削した。

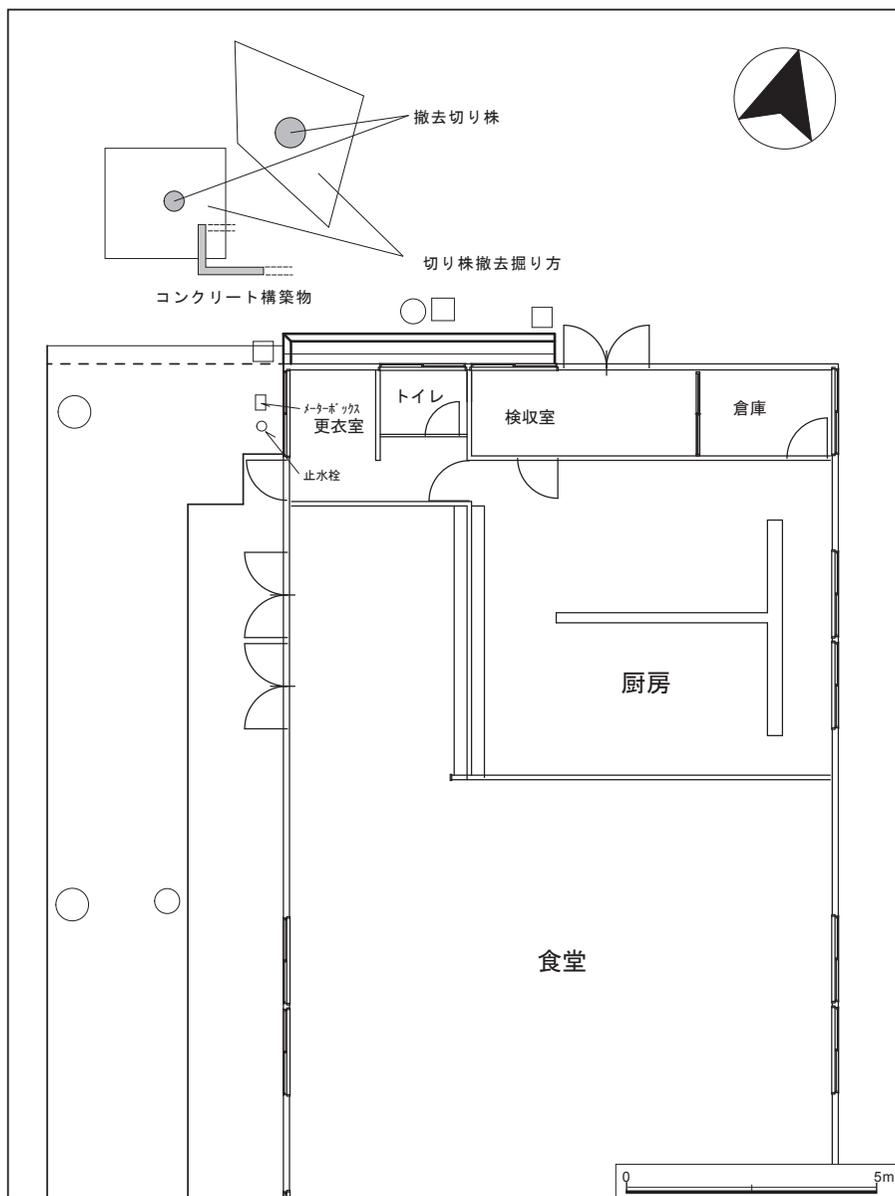
2区西端から東へ約3 mまでは複数の配管があり、堆積層は配管掘り方の埋土が主体であった。西端から約3 m以東は、安定した堆積状態が観察された。アスファルト舗装、碎石層（約20cm）の下層は、灰褐色系砂質土（約10cm）、黄褐色～橙褐色層（50cm以上）が堆積している（写真71・72）。橙褐色～黄褐色層は旧制広島高等学校設置に伴う造成土（以下、造成土と略す）と思われ、粘質土と砂質土（真砂土）の互層で、よく締まっており、全体としては粘質土が優勢である。地表下0.5～0.6 m付近では長さ15～20cm前後を主体とするやや小型の角礫が多数包含され、地表下0.7 m付近から大型の角礫が比較的密な状態で包含されていた。造成土上に堆積する灰褐色系砂質土は複数枚に細分でき、出土遺物が出土しなかったため時期を特定できないが、旧制広島高等学校の時期の堆積層を含んでいる可能性が高い。

土管を使用した排水管を2ヶ所で確認した。1ヶ所は西端から約3.4 m、もう1ヶ所は西端から約5.8 mに位置する。後者の掘り方は造成土上面から掘り込まれており、前者も、掘り方がやや不明瞭であったが、造成土上面から掘り込まれているようである。旧制広島高等学校に関連する排水管と考えられる。

なお、西端から10.5 mに既存排水管（ヒューム管）が位置していた。掘り方幅約1 mで、

深さ約 0.9 m まで掘削して排水管周囲のコンクリート補強部を含めてすべて撤去した。地表下約 0.9 m 以下は暗灰色砂層であったが、調査範囲が狭いため、堆積層の広がり確認できなかった。

3区 長さ（南北）約 3 m、幅 0.5 m、深さ 0.9 ～ 1 m の規模で掘削した。3区に接して南側と北側に既設排水柵が位置しており、地表下約 0.5 m に既設排水管が付設されていた。



第 26 図 中・高食堂廻り舗装改修工事調査区配置図 (1 : 150)

調査区西端部を中心に、地表下 0.25 ～ 0.5 m で黄褐色～橙褐色層を確認したが、大半は既設管の埋積土であった（写真 73）。

3) 中・高食堂廻り舗装改修工事

所在地 広島市南区翠一丁目 1 番 1 号

調査期間 2015 年 12 月 24 日

調査面積 約 128 m²

調査者 藤野次史

調査概要 広島大学附属学校部（翠地区）中・高食堂廻り舗装改修工事のうち、切株撤去に伴って立会調査を実施した。撤去切り株は 2 本で、食堂北側に位置する（第 26 図）。西側切株撤去掘り方（写真 75）は、約 2.8 m × 約 2.2 m、深さ 0.4 ～ 0.50 m、東側切株撤去掘り（写真 78）方は、約 2.8 × 約 2.6 m、深さ 0.5 ～ 0.7 m の規模で掘削した。西側切株撤去掘り方南東隅でコンクリート構築物（地表下約 0.1 m）を検出した（写真 76）。2015 年 10 月 21 日に附属学校部食堂改修機械設備工事に伴って実施した立会調査（本節 63 ～ 66 頁参照）で検出したコンクリート構築物と同一のもので、その北側部分にあたる。今回の調査で西辺部および北辺部の一部が確認され、10 月 21 日に検出した部分が南辺部にあたることが判明した。平面形状は長方形と推定され、幅 15cm のコンクリート壁で構成される箱形の形状をしている可能性がある。現状で確認できた規模は、西辺部の長さ約 1 m、南辺部長さ 1.3 m 以上、高さ 0.3 m 以上の規模である。検出したのは構築物の一部の



写真 74 中・高食堂廻り舗装改修工事西側切株撤去状況（南より）



写真 75 中・高食堂廻り舗装改修工事西側切株撤去完了状況（東より）



写真 76 中・高食堂廻り舗装改修工事西側切株撤去掘り方南東隅コンクリート構築物と鉄製配管（北西より）



写真 77 中・高食堂廻り舗装改修工事東側切
株撤去状況（北西より）



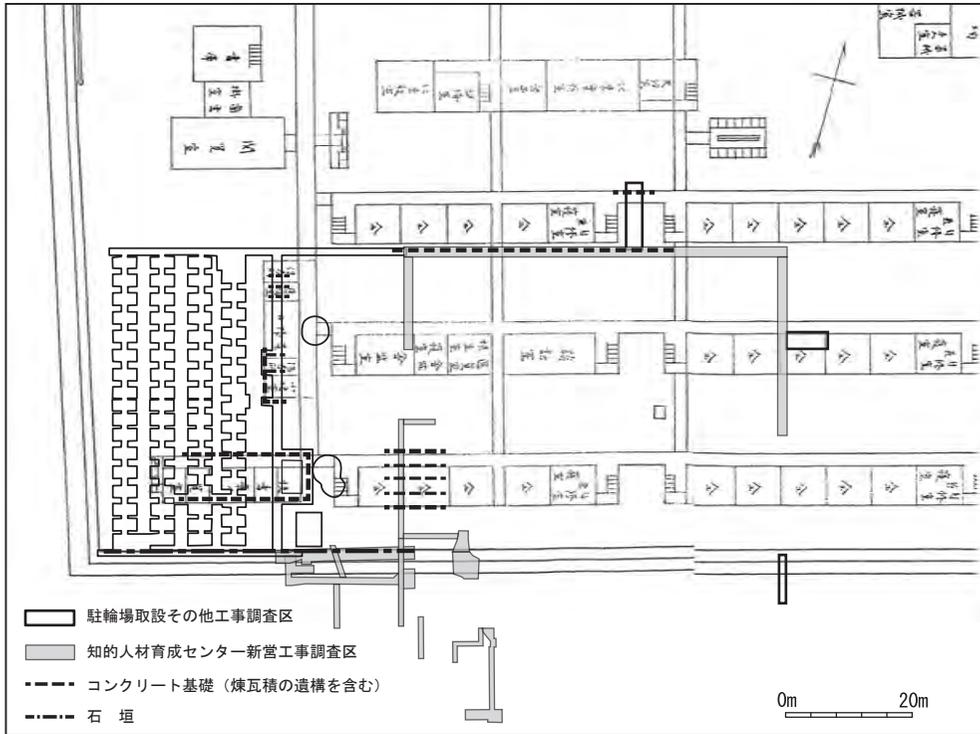
写真 78 中・高食堂廻り舗装改修工事東側切
株撤去状況（西より）

みで、規模、構造、性格など、詳細は不明である。コンクリートに含まれている石は小碎石のみで、第二次世界大戦後の構築物と推定される。

3. 小結

本年度（2015年度）は、東広島地区、霞地区、東千田地区で立会調査を実施した。東広島地区はいずれも遺跡整備に関わるものである。霞地区では、環境整備（たんぼぼ保育園園庭拡張）工事、臨床研究棟改修工事、臨床研究棟改修機械設備工事に伴う調査において、コンクリート床、コンクリート構築物などの広島陸軍兵器補給廠（兵器支廠）関連の遺構を検出した。とくに、たんぼぼ保育園ではコンクリート床を広く検出した。これまで、たんぼぼ保育園周辺では、2007年度の前爆放射線医学研究所研究棟新営工事に伴う調査、2010年度の大学管理棟新営工事、外灯新設・改修工事に伴う調査などでコンクリート床とともに、鉄製レール、石組排水路、水槽状遺構など、多数の遺構が広い範囲で検出されている。これらの遺構はいずれも同一の大型建物の一部と考えられる。たんぼぼ保育園周辺は、第二次大戦終了時に第13兵器庫が位置していた場所にあたり、同施設が解体撤去された後は通路や駐車場として利用され、建物等の大型施設は設置されていない。このことから、前節の報告の中でも指摘したように、これらの遺構は第13兵器庫に比定できよう。

東千田地区では、東千田未来創生センター（工事名は知的人材育成センター）建設関連の工事ほかに伴って4件の調査を実施した。中でも、知的人材育成センター新営工事、駐輪場取設その他工事に伴う調査では、多数の遺構が検出された。前者は前年度からの継続調査で、前年度は建物本体の基礎掘削部分を中心に木杭列などが検出され、広島高等師範学校に関連する建物遺構などが残されている可能性を想定していた。本年度



第 27 図 広島高等師範学校施設配置と 2015 年度の調査区配置図 (1 : 1,200)

(広島高等師範学校の施設配置図は第 21 図と同じ資料を利用。方位は位置を移動。)

は新設建物周辺の外構工事に伴う調査で、17 区・31 区で建物基礎と考えられるコンクリート基礎を検出するとともに、29 区で石垣および排水路、16・21・25 区などで道路遺構の可能性のある硬化面（上下 2 面）を確認した。後者では、4 区を中心に複数のコンクリート基礎を検出し、前者の 29 区検出の石垣を 9 区で検出し、石垣は東西約 48 m に渡って構築されていることを確認した。二つの工事予定地で検出されたコンクリート基礎は煉瓦建物の基礎と考えられる。『広島高等師範学校一覧』（明治 37 年～大正 10 年）との対比から、前者は「高等師範学校寄宿舎（自習室兼寝室）」ほか、後者は「仮書庫及閲覧室」、「昇降口・湯呑所・小便室」ほかにも比定されよう。石垣（排水溝）は高等師範学校の南側敷地境と一致しており、敷地境界を示す遺構と考えられる。石垣の外側は現状で約 0.8 m 低い。移転前の広島大学教育学部とその南側のグラウンドは約 1 m の高低差があり、広島大学設置後も元々の地形を利用してグラウンドが造成されたと推定される。以上のように、東千田地区では、広島高等師範学校関連遺構が広く残されていることが明らかとなり、その内容を具体的に検討できるようになったことは大きな成果である。また、今後の開発にあたっては文化財保護の観点から一層十分な協議が必要である。